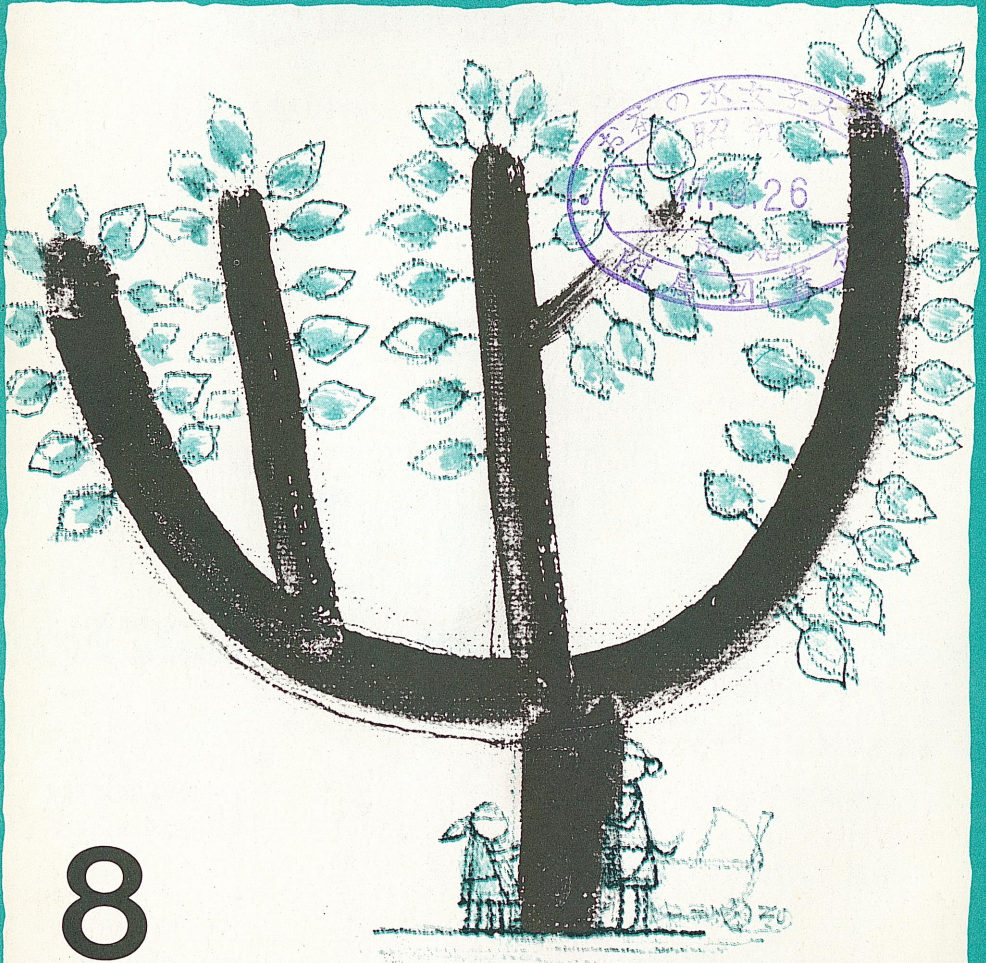


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十一卷

第八号



8

日本幼稚園協会

昭和四十一年八月一日発行 毎月一回 日発行

昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第六八二号 幼児の教育 第七十一卷 第八号



日本保育学会監修

保育学講座 <全10巻>

A5判
上製本ケースつき

各巻1,200円

- | | |
|----------------------|--------------------------------|
| 1. 幼児教育の原理と方法 | 6. 子どものしつけと性格
—乳幼児期から中学期まで— |
| 2. 保育課程 | 7. 子どものおもちゃと遊びの指導 |
| 3. 日本の保育制度 | 8. 幼児の身体発育と保育 |
| 4. 現代の幼児教育—海外の動向と進歩— | 9. 日本の幼児の精神発達 |
| 5. 幼児の生活指導 | 10. 幼児の両親教育の研究 |

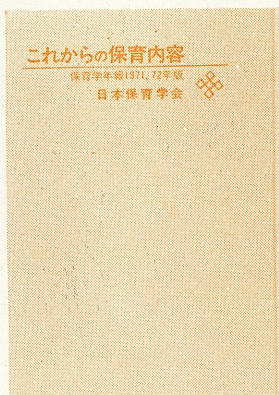
これからの保育内容

保育学年報1971, 72年版

日本保育学会編

A5判

価格 2,000円

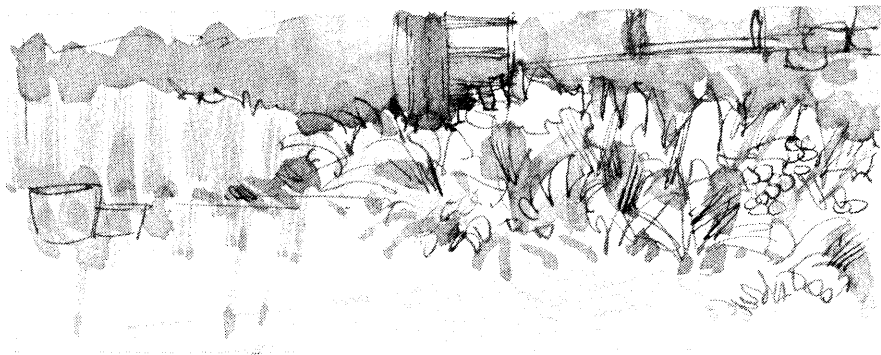


- ・保育者には欠かせない問題、望ましい保育内容について気鋭の先生方が研究成果と豊かなビジョンを展開。
- ・現場の方は実践の支えとし研究者は基礎的文献としてお手もとに一冊は必要な本。
- ・明るくハンディな造本で従来より大幅に値下げしお求めやすくなっております。

幼児の教育

第七十一卷 第八号





幼児の教育目次

——第七十一卷 八月号——

表紙 園 房江
カット 斎藤信也

倉橋惣三選集より……………(4)

★講演……………(5)

幼児教育の原点……………森田 宗一……………(5)

★講演

昔話のユング的解釈・その一

——忘れ者の話——……………河合 隼雄……………(23)



私のオブザーベーションションズ

— 幼児教育日本留学報告—II マリヤ・リー・ベナビデス (45)

愛珠・想い出するままに(其) 中村 道子 (49)

錦にしきのはなし 横張 和子 (54)

壁画古墳、高松塚の感動 太田 康和 (62)

洋書紹介 江波 諄子 (66)

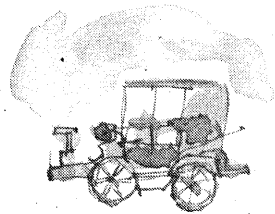
日光保育

が充分に、なくして、日光の栄養作用がある。戦時食糧
 生活は、昔から、このように、勤め、農夫が、日光を、尊重す
 る。如何に、強い、こゝろ、である。今日、お天気が、まは彼
 等、感謝に、充ち、た、歌、である。いま、多忙な主婦が、日
 を、惜む、その、誰か、一層、の、と、が、今日、の、忙、に、おひよ
 り、は、彼女、等、の、喜、び、の、ほ、ち、た、讚、語、の、結、構、な、おひよ
 等、も、日、光、の、活、用、の、今、日、の、真、剣、な、こ、と、は、彼、等、も、彼、女
 ら、い、で、あ、る、う、そ、の、今、日、の、自、ら、ま、っ、黒、に、日、に、や、け、て、い
 る。今日、日光、活用、に、最も、真、剣、な、一、人、が、戦、下、の、幼、児、生
 活、を、護、り、強、く、遅、く、保、育、す、る、こ、と、を、任、し、て、い、る、保
 母、君、に、必、要、な、一、切、の、手、段、を、少、く、と、し、て、開、け、
 ば、い、た、で、あ、る。一、切、の、手、段、を、少、く、と、し、て、開、け、
 と、う、心、の、有、り、無、し、だ、け、が、問、題、に、な、る。日、光、を、与、え、たい

(倉橋惣三選集 第四卷 戦中小编より)

幼児教育の原点

森 田 宗 一



一 はじめに

・わが歴史（生活史のこと）

最初に、恥ずかしいことながら、私自身にまつわるいくつかのことをお話させていただき、一つのあかしとさせていただきますと思います。

私は、本にも書いているとおり、生まれそこないでした。幼な友だちにも「宗ちゃんは、やせっぽちで人の前ではものを全然いわない子どもだった」とよくいわれました。

私は、自分の生活歴といえますか、誕生日からのわが歴史、わが家の歴史というものを分析してみました。私が

母の胎内にやどりましたころ、わが家は最低の時期でした。「気はやさしくて力なし」の典型のおやじが家運を傾けました。母親は無学でしたが、いわゆる「お袋」というにふさわしい、でんとした安定感をもった人でした。このごろのお母さんや先生のように朝から晩までイライラ、ガミガミしたり、あるいは機関銃ママとあだなされるような言葉を発射しないのです。黙々働いている、家を支えている、鎮座しているというだけで。それだけで、まるでふるさとの山のように安定していました。そういう母親の姿勢のおかげで、子どもたちは直接母親のかげ、というか、母親の翼のもとで安定感をもってすごせたという気がいたしました。

私は、また早産児だったらしく、幼少のころ、大変虚弱であった上に、ろくすっぽ栄養のあるものは食べられない状態でした。ただ、山村で生まれ育ったことにまず感謝していました。

ただ子どものころから、いわば内向型の問題児だったと思います。やせっぽちでかぜをひきやすく、人世をむなしく感じたり、生まれてこなければよかったか思うことがよくありました。

今でも本性はかわらないのですが、とりわけそのころは内向的神経質な問題児だったと思います。

十代のころは、家庭を離れ、東京にでて昼働きながら夜学ふという生活をしました。父は私が中学を終える前に死にました。そのころむなし日々でしたが、高等学校に入ったころ急に世界が開かれたという気がいたしました。十九歳のおわりごろです。そのころ、兄も五人の子どもを残して死んでしまいました。そうになると、母は兄嫁と孫五人を背負って一家をささえるということになりました。学生時代私が、その子どもの面倒をみるためにちよくちよくもどって行つたとき近所のおばさんが、「宗ちゃんは、まだ生きてたのかい」といったほど、私は生まれそこないでやせっぽちで虚弱だったのです。

その私が、今ここにこうしていられるのは、かえりみますと、多摩川の上流の山と川と自然という母なる大地の中ですごせたということ、そして何よりも母親が、お袋であつてくれたこと

だったと思います。

幼児のころから「さずかりものは、丈夫に育たないはずはない」ということを母親は、よく申しました。弱い子だということとは意識させないようにしましたね。寒い時には山まで走らされたり、うす着で外に出させられたりしました。そのことが今も十万年も前からかわらない親の育児のいとなみのコツだろうと思います。医学的にみても児童学の面からみましても、可能性を開発するという正しい姿だと思ふのです。

今日の時代は、いかに「もやしっ子」製造業を親や保育者はしていることか。それが少年以後の青年期になつてもさまざま問題のもとになつており、後遺症をみるのです。私みたいな生まれそこないでない、まるまると太つて強く生まれた子を、三、四年の間にだれがもやしにしてしまうのでしょうか。政治や行政やいろいろなことのしわ寄せを子どもが背負われ、親のところに防波堤がなかったり、家庭そのもののおかれている社会に問題があつたり、あるいは医療制度のひずみが、持つて生まれた可能性をゆがめるということが、残念ながら常識になりつつあるのです。

今や人類の先は暗いと科学者などにいわれています。私は逆にそういう暗い時代だからこそ、勇氣と望みの光を求めるときではないか、むなしさの中に本当の人間のあかしがあるので

はないかと考えるのです。

私は、少々必要以上に自分の虚弱でできそこないであったことを話しましたが、自然という母と、お袋の生き方、倉橋先生流にいうなら「育ての心」をもった母親のおかげで、ここにこうしていられるのだと感謝しているわけです。

今の臨床の場で、「気はやさしくて力なし」青少年とか、なるべくしてなったような心身虚弱児をだれがつくっているのかと問いかえされなければならぬケースにたくさんぶつかるので、恥をしのんで私のことを具体的に話し、皆さんにこのことをとくと考えていただきたいと思っただけです。

・親子の出会いと別れと再会

もう一つお話ししたいのは、私はさきごろ二十六歳の誕生日を迎えました。私は、大正四年生まれですから、三十年差し引いているわけです。

うちにはよその子とうちの子の区別のわからないぐらいたくさんのお若者(光の子学園の子どもとリーダーたち)が出入りしておりますが、私ども夫婦には五人の子どもがおります。上二人が息子で、下三人が娘です。皆、人生の鈍行が好きらしく、ストリートで進むのが少ないですね。そういえば私自身も鈍行でした。小学校を終えて上京し夜間中学校へ行きました。働き

ながら学び、一年浪人し、安あがりする学校だときいて一高へ入りました。高等学校から大学へいく時、何をやっていいかわかりませんから一年浪人しました。子どもの問題をやるうと思いましたが、どうやればよいかわからずボヤボヤしているうちに一年。そして、大学を出て一年、また司法省保護局でブラブラしました。そのころニューマチにかかり三、四ヵ月寝こみ、その間に司法試験をうけました。昭和七年、戦争突入のころでした。

今から思うと、そのころ大きな影響をうけた方に倉橋惣三先生がおりました。私は、直接に教育学とか児童学とかでの弟子というにはふさわしくないので。しかし、暖かい人柄にひかれてよくお目にかかりました。詩人でもあり信仰の人でしたが、科学者だったとも思います。人間というものの可能性をみつめる目は、実に客観的で明るく暖かい人だった。先生は子どもの世界をよく理解し、幼児教育の科学化への先達だったと思います。先生の感化もあって、私は、児童の問題、少年の問題、非行少年の問題へとすすんだように思います。

話はもとにもどります。

長男、次男は、まだ独身ですが、長女は結婚しました。そのうえ一番末の十九歳になる娘が、彼女の過去を総括して、ある人生に賭けたいと、大学へいくのをやめて修道院へ行きたいと、

言っていました、兄の失明の事故が機縁で、兄の友人と出会い、結婚することになり、彼とともにそれぞれ家庭と親を離れて、アメリカへ旅立って行くことになりました。

親と子との出会いと別れ、そこに家庭教育があると思います、別れの時に当たって改めて育児・保育とは何か、ということとを深く考えさせられるように思います。

幼少時から目先のことだけを無難にすすむのではなく、遠い視野をもって先の長い人生、十年、二十年先においておくのである、思いがけない出来ごとに対処できるような、どんな風雪にもたえていける人柄をつくっておかなければならないと思うのです。人間はたしかに、死ぬまでは生きています。その長い旅路の先の日のためにこそ、今、何をしなければいけないのかというところが大切なのです。ところが目先のことだけにのみとらわれているのが、今日の保育のように思われる。技術化されすぎた非科学性だと思うのです。

ちょうど今から三十年前、私は結婚するのと仕事につくのと同時に家庭の出発をしました。ようやくここまで来た感じですから、今あの初心にもう一度かえって、出発し直したいと思つたわけです。娘も十九年を総括し新生活に入るなら、私も五十六年を総括してみようと考え、その一里塚の一つとして、昨年、「人間の復興(雷鳥社)」という書物を書きました。これを旅

の道標として、二十六歳宣言をしたわけなのです。私の五十六歳の誕生日を五人の子どもと二人の娘の夫たちの七人で祝ってくれました。その七人の平均年齢が二十六歳です。

その時、七人が思い思いのひとこまを書いてくれました。その中で長女の書いてくれたことに親子関係の原点をみる思いがしました。

それは、

「お父さまは二十六歳を宣言し、新しい誕生の日を迎えて、新しい人生をもう一度勇躍して進もうとなさっているんですね。新しい日なんです。私も出かけます。太陽にとけた海をみつけ、これからは若があつたお父さまとの出会いをいつも大切にしていきたいと思えます。」

短い文章ですが、「私も出かけます」というところに心うたれました。(少々親馬鹿というところでしょうか。娘が嫁にいったりすると、父親はおもてでは何事も無いようにふるまいながら、心中では寂しいというのが定説のようですが、私も親馬鹿の一人として少々その味を味わいながら、もう一つの新しい思いを強くしたのです。われわれも新しく再出発しよう。娘たちの新しい人生の旅にあやかって負けずに前へ進もうという気持ちです。「おれは二十六歳。彼女たちが選んだ彼氏は二十七歳と二十八歳。そうしますと、私よりも安心な、良い夫としての要素を

もっている。あるいはこちよりも品質がよさそうだ。こちらは、あちらをおいかけるのだ」という気持ちが強いのだろうと思えます。

私の家庭のことを語り過ぎましたが、親と子に関するある詩をここで紹介しておきましょう。「家庭における児童」というテーマで、十数年前東京で開かれた世界国際児童会議のある分科会で、香港大学のアメリカ人教授のミス・ライトという方が講演中、日本を含めて、アジアの家庭と子ども」というようなテーマで話されて最後に引用された、レバノンの詩人カーリル・ギブランの詩です。

「あなたの子は、あなたの子どもであって、あなたの子どもでない」という題です。「彼らは、明日の家に生きている」という題としてもよいと思えます。

彼ら（青春期になった子たち）は、人生の希望そのものの息子であり娘である。

彼らはあなたを通じて来るがあなたから来るのではない。

彼らはあなたとともにいてあなたに属してはいない。

彼らの魂は、あなたが夢の中でさえ訪れることのできない明日の家に住んでいる。

あなたは彼らのようになろうと努めてもよいが、彼らであ

なたのようにさせてはいけない。

なぜなら、人生はあともどりもしなければ、昨日のところにどまってもないから。

あなたは弓であり、あなたの子どもは、それから生きる矢として送りだされる。

私は、この視野を日本の親が持つように努めたいと思うのです。ことに母や教師が、幼児を保育していく上に持っているべきだと思うのです。この詩を知って十数年来、いよいよその感を深くすることが多いのです。成長しゆく子どもの思いと願いを代弁しているように感じるので、親を離れ旅立ち別れていく子どもの姿の中に、そうなった後の親子の再会の中にこそ、本当の親子関係があるといえるのではないかと思うのです。

二 このごろの子どもの問題

・親と子のつながり

このごろの家庭とか幼児教育における子どもの問題を実例を中心に考えてみましょう。

「もてあますように育ててもてあます」という川柳がありますが、いろいろ明暗のある事例にふれておきますと、子どもは、「親のかけ、もしくは鏡だな」とこの親にしてこの子ありと

思うことにしばしばぶつかります。

周囲の影響をうけやすい子どもにとって、最初だれと出会い、それからだれとどこでどう出会っていかか大切なことだと思います。その子の「わが歴史」になるのです。

人間は、ただ食べて大きくなるというのではない。人間は、愛を食べて生きていく生き者と定義することもできません。人間というのは、人間と人間との出会いによって教育されるものなのです。人間らしく人間に出あって、その中で人間形成というものが意識的あるいは、無意識的におのずからなされてくるものです。

そういうプロセスが幼児のころから必要であって、十代になりますと、自ら自分の道を選択して、責任をもっていくようになります。それ以前は、親や保育者の影響を非常にうける。そこに大事な教育の問題があります。

よく教育相談の場で、母親のうったえを聞くことがあります。「言うことを聞かず、わがままでがんだ」とか、「偏食でまんが足りない」とか、いろいろうったえるのです。面接の秘訣は、大変忍耐のいることですが、よく聞いてあげることです。すぐに結論を出したり、診断を下したりしないで、本人に言わせることです。その話を聞いてみると、子どもの症状は、母親とそっくりなのです。「子どもは、あなたと同じですよ」と直接

いうのは、簡単ですが、これでは母親をおこらせるだけです。母親自身が「そうだった」と思い、自己洞察ができ、自分自身にかえってくれたときに、その子の治療が始まるのです。

鑑別所に入れられている十八、九歳の少年の父親や母親の中にも、なぜそんなところに入れられているのかわかっていない人がしばしばあります。ところがある少年の場合などでは、わずか二週間の間に、両親が「本当に親って何だったのか」ということをしみじみ考え、総反省されました。それが十年前からわかっていれば、こうならなかったでしょうにと自覚しました。その少年も最初会ったときは、彼自身自分のことばかりしやべり、世界は自分中心にまわっているのではないかと思っておりました。鑑別所の先生方の客観的なテストや、その中で生活していること、親との面接なども影響したのでしようが、それより何よりも、彼自身の洞察があったとしかいいようのない変わりようでした。

父親が、「息子は、短い日時のうちにこれほど成長するとは思わなかった」というほどです。少年にいわせると「お父さんには反感をもち、ただそのそばから逃げる。そうするとお母さんが、かばってくれる毎日だった」そうです。

ようやく親と対話できるようになったといえますか、親の身になって、その立場がわかる状態になったわけです。もう、こ

れは治療の始まりです。ここまでくると、その少年の非行性といえますか、問題は解消しつつあるのです。一般的に、そこまでもっていくのに、三ヵ月か四ヵ月かかります。少年を家庭から離し、その子の生活史、親の歴史、親と子のつながりの歴史を総反省し、原点に復帰して、新しい日をスタートさせるには、半年、一年とかかります。そして必ずしも成功するとは限らないのです。

十八、九歳になった非行少年とか問題児のような特殊な場合ですらこうです。幼児や児童ぐらいの時の教育相談、自閉症の問題とか、わがまま、偏食、その他いろいろな問題解決の場合なども、こういう出発点が必要なのです。

●もてあますように育てられている子

近ごろ、産むのだけでも大変なのに、育てるのは社会に、などという無責任な母親もいますが、そういう母親をのぞいては、「自分のすべてを変えてでも子どものためには」と思っている熱心な母親が多いと思います。その育て方をみますと、「もてあますように育ててもてあます」なのです。まず出発点、ボタンのかけ始めから間違っているものが多い。それをそのままにしておいては、どんな治療をしても、どんな立派な施設に入れてもなおりにくいのであろうと思う。非行少年を育てている親の

背景にある問題を歌にたくしますと、「そころぶ、それあやうしという老婆心のすぎたるまもり子らをそこなう」なのです。無保護もいけません、過保護もいけませんね。これは必ずかしいことですが、まことに子どもにも一生懸命なりすぎのあまり、真向きになりすぎているのです。

雨がちょっとふると風邪をひくのではないか、せいぜいするとぜん息ではないか、それを医者だ、クスリだ、と心配したり、あわてたりする。そんなことは、医者と相談し、子どもの本当の姿を見る目をもって承知で知らんふりをしていけば、大方なおる場合が多いものです。

昔の母親など無学ではあっても、そういう子どもを見る目はもっていたのではないか。内心はどんなにハラハラ、イライラ、オロオロしたかわからないだろうと思いますが、「さずかりものは育たないはずはない」「大丈夫だノ」と宣言したのではないかと近ごろになって思うのです。心配してみたり、ちょっと悪いと誇大に考えてみたりするのは、いつに変わらない母親心だと思うのです。そこに母親のありがたさがあるのですが。故人の言葉でいえば「子を生むことはだれでもするが、親たることは至難なことだ」ということ。倉橋先生流にいえば、何より親の「育ての心」が大切だと思えます。真向きよりむしろ横顔と、しる姿です。

とかく、母親は「それころぶ、それあやうし……」といった
いものです。特にちょっと弱い子はかばい過ぎになり、かえっ
て弱さに深入りさせやすいものです。子どもの本当のニードは
何であるのか、その子には、どんな可能性があるのかをよく見
きわめて、線を太く息をながくして間をおいて、つまり大きな
間合いをとって保育したいものです。

・欲求が満たされやすい世のケース

今日、物に余って人間の精神足らぬ、異常な消費社会におい
て「おしみなく物を与えて子どもに、自主性を与えぬ親の無慈
悲さ」という親が多いのではないか。高度経済成長の中での家
庭教育の無慈悲さを感じるものがよくあります。与えすぎてい
るのです。それは愛の親切とはちがいます。おあずけができに
くいのですね。親だけでなく教師の無慈悲もありますね。あん
ちよこを与えないで考えさせることが少ないのです。おあずけの
中におかれると人間の脳の前頭葉の発達がうながされるわけ
です。人間は、抑止されたり、想像し工夫したり、いろいろな抵
抗を感じながら、三歳から六歳ぐらいまでに脳の発達が大きく
成長するといわれます。

それが、おしみなく物を与えられ、まわりから物でもって欲
望がすべて満たされてしまうと、前頭葉の皮質が発達しない。

それが習性になってしまい、ブレーキのきかない子になってし
まうのです。まさに「気はやさしく力なし」意志力抑止力、忍
耐力、物をやりとおす力、がまんする力などが育っていかない
のです。本当にこのごろの非行少年などの背景をみると「おし
みなく物を与えて」おあずけの味がないのです。だから依存的
で、つい人にさそわれると悪いことでもいやだといえなくなる。
欲望と物との間に距離を置き、間をおくということがない。人
間を育てるということの素朴な大事なことが欠落してしまっ
ているのです。

・ある実例

次にお話するケースは、今の非行少年のおこす問題行動の
多くに共通する問題を含んでいると思います。

A、B、C、の高校生三人が、ちょっと知っているかわいい子
ちゃんを送ってあげようと車に乗せ、あてのないドライブにさ
そう。目的のないドライブ、しかも夕方、やがて夜になる。相
模湖畔、月は直天に、星は天涯に、ボートは湖面にうかんでい
る。何かおこりそうな絶好の舞台装置ですね。水、車、月、星、
……。こういう時はあぶないということは、女性の身ごなしに
も問題がありましようが、男性自ら自分をコントロールするこ
う抑止力がないと大変です。おあずけができないということ

が常に問題になります。ある日大変な事件がおきました。

その時までA、B、C三人は、自動車窃盗を何件もやっている。盗んだ車で湖畔へ行った時の事件は強姦ということですが、欲望の抑制力がなく、人の身になって考える力も十分でないのですね。欲望を刺激するようなものが満載された社会で、とりわけ意識的におあずけするとか、人の身になって考えるとき、その場にどう対処していくかなど、学ぶ練習をしておかなかった結果、むなししい人間性の喪失をきたし、まさかと思う事件をひきおこしたわけです。

この少年たちは、鑑別所での専門的な診断の結果によりますと、素質は悪くなく、知能も低くない。家庭では何不自由なく育ちました。生まれた時もまるまるとちゃんとしていたにもかかわらず、一年たち、三年たち、五年、十年、そして今や十五、六歳、親を乗りこえて、船出をしてもいい時期なのに、過保護といえますか、依存性が強いといえますか、悪い子ではないのですが、結果的にはとんでもないことをしてしまっているのです。こういう犯罪とは限らず、教育相談の場などにもよくあるケースですね。幼少時からの生活歴中に性格形成の盲点があるのです。

十代の半ばをすぎますと、男性は性に対する発散的な欲望、関心が強くなります。欲望それ自体が悪いというわけではない。

どこでどう満たし抑止すべきかが身についているかどうかが問題です。ことに性のことは、相手の人間の大事な運命にかかわることだという情操が育てられていけば、それが歯止めになるわけです。それをどう処理して、どうふみ台として動物以下にならないか、万物の霊長たる道をすすめるかということですが。

A B C少年の非行の中心はA君でした。A君の親は典型的に教育熱心で、物に余る生活をしていました。父親は会社の重要な役付で母親は高等教育をうけ、地域の婦人会や何やらの役員などもした者です。

「うちの子にかぎってこんなことはない」というA君の母親に、こんなふうにはたずねた。

「こんなはずはないといってもこんなはずになってしまった。何か思いあたるふしはないですか」

すると情なさそうに「いっしょうけんめいやってきたのですけど……」というだけです。しいて言えば、子ども中心に、ホイホイ物を与え、一生懸命にやりすぎたのです。もう少し横顔、うしろ姿でやればよかったです。そしてこんなこともおっしゃる。

「うちの子は気がいいものですから、さそわれるといやといえず、お友だちに、ついさそわれて」

更に母親の言った言葉は聞きすぎてにできないと感じました。

「何不自由なく与え、私自身を犠牲にしてまでも子どもにはしてあげておりましたのに、親のことも考えず、めいわくをかけて……」とくりかえす。「何不自由なく」気ままに与え、させたいという。ここに大問題があったわけです。しかも母親は今になってそのことを悟らないのです。

「おしみなく物を与えて子どもらに」のあとに「おあずけの味与えぬ」人の身になる心与えぬ」のびのびと活力をもって、物事をやりぬくことを与えぬ」と言いかえてもよいでしょう。

ここに今日の家庭や学校における重大な教育の課題があると思うのです。

・おあずけの味、待つ心

さて、「おあずけ」という意味の語源は、そうくわしく調べたわけではないのですが、欲望と物との間に距離を置く、時間を置く、ちょっと待ちましようという「待つ心」だと思えます。

それが、兄弟大ぜいいますと、それぞれ虚々実々にそう簡単にストレートに右から左へというわけにはいかないから、自然に身につくわけです。一人っ子とか、二人子とか、物が余って、余裕のある家庭の子は、親や保護者が、意識的に歯止め、おあずけの味を与えないと、盲点ができません。

かえって物の乏しい時代、戦後の一時期、他の点でマイナス

はあったかも知れませんが、皆と分け与えていかなければ生きていられないという時代の方が、子どもを育てやすかったといわれるゆえんです。

私の家なども、戦中戦後、九年間の間に五人の子どもができて、おまけによその非行少年をあずからなければならなかったという状態でした。いもの子を洗うような、大ぜいわいわいしている間に、自然に子どもたちは、お互いにけん制しあい、ゆずりあい、ともに分け合うということを学んでいったと思うのです。これが一人っ子だと、長男など今ごろどうなっていたか、私どもも大きな失敗をしていたでしょう。しかし下からぞろぞろ、ましてよその子などもあるとなると、大変です。母親と一緒にいもを買いにいたりして、小さい弟妹のめんどうもみなければならぬ、そういうことが彼自身の活力や抑制心をやしなつたのではないかと思えます。

私は別に多産主義を主張するわけではありませんし、産児の問題にはいろいろむずかしい事柄が含まれています。しかし、割り切ったいい方をしますと、子どもは少ないと育てにくい。まして、「子どもは一人か二人にして、主人よりましな子に育てよう」などというような料見がよくない。人間をそんな粘土細工みたいに考えている根性がまちがっていると思います。人間は、そんな生やさしい生物じゃないはずですから。こちらの計算ど

おりにはならない。思いどおりになったら、それこそ大変だし、第一面白くないですね。そこそ教育の仕事や保育学、児童学などは、一生をかけるにあたいたいしな事になりましょう。

・人間と動物

動物だってそう簡単に育てられないのではないでしょう。か。まして人間は複雑で、天使にも近くまた動物以下にもなり得る。育て方と教育によるのです。まんぜんと人は万物の霊長だなんて人間が自分でいっているのは、おこがましいことだと思いません。諸動物にまさる霊長になるかどうかは、人間が与えられた自由をどう活用するか、そのためにどう育成されるかにかかっていると思うのです。それが万物の霊長だと自らを誇り、世の生きとし生けるものを目先の目的のためにまっ殺したり、生きるものの生命のバランス（連関性）というものを無視したところに、近代人間の悲劇があると思います。その結果公害というものにせめられ自分で首をしめるようなことになっている。公害の原点は、私はそういうものだと思うのです。

もつと根本をいえば、現代文明の科学主義によっておこってきたのです。生きとし生けるものをまっ殺つてあつかつて、殺さなくてもいいものまでその生命をまっ殺してきてしまったところに起因しています。極端に言えばバクテリアだって、小さい

プランクトンも存在の意味があるのです。野兔や、やもりや、とかげだって、生きていく意味があるのです。

開発のおくれているという東南アジアへいってごらんさい。やもりだつてとかげだつて人相（？）がいいですよ。野獣だつて、自分の腹が満たされていて、おのれの生命をおかされないとわかれば、みだりに人をおそうということをしなないものだと思います。大きな海亀だつて、人が大ぜいで見まもっている中、砂浜で平気で卵を産んでいるといいます。

ところが人間というやつは、欲望無限で欲ばりですね。先にA、B、C君の例でいきましたように物欲や性の問題でもそうですね。動物は、種族保存のため自然のさだめたさかりの季節には、まことににぎやかなことになりましたが、自然（神さま）が歯止めを与えてくれますから、さかりの時がすぎると、聖人みたいに静かに無欲になりますね。犬でも猫、猿でもそうでしょう。ところが人間はどうですか。家庭裁判所で取りあつかう例だけみても、三角関係だとか四角関係だとか、妻だつて負けてはいません。お互いに三角、四角関係を持ち、てんやわんやで後追いかけていって、硫酸ぶっかけたとか刺し殺したとか、家庭問題にとどまらずトンデモナイ犯罪をおかしてしまうこともある。あるいは、自分の女房に保険をかけ、自動車にも保険をかけて、女房と子どもを自動車に乗せ、自分だけさつと

おり、断崖へおとして殺したという事件もありましたね。また自分のボーイフレンドのやくぎに亭主を殺すことを委託し、うまく思い通り殺させ、そのお通夜には喪服を着て、「わが愛する夫よ、悲しいことよ」といった表情でとりつくろっていた女もいると報道されていますね。人間はそういうおそろしい怪物性の一面も持っている。万物の霊長たる資格のある人間が、そうなるためには、そうなるように教育され、自己形成しなくてはならないのです。

おぎゃあと生まれた赤ちゃんのころから、幼児期をおし、少なくとも三歳、四歳のころから、「ちょっと待ちなさい」が「まんしなさい」という素朴な形で欲望に歯止めをすることを学ばせられ、欲望に対処し、有効に活用することを学ばせられなければならぬわけです。幼児教育、児童教育が熱心な今日、科学的ということが強調される今日、かえってその人間の素朴な人間性の原点、人間育成の源というのがはずれている。大変非科学的で非人間的なことが行なわれている。少なくとも私どもの臨床の場におけるケースを通じて、年々歳々そう思うことが多くなっています。

幼少時には、何といっても親の責任であり、親にかわる保育者の責任でもあります。やがて自己責任において自己形成をします。その基礎力を培うのも幼時からの人間教育であろうと思う

のです。

人間とは、そんなものだということを幼児保育に当たる者が忘れてはいけないと思います。パスカルの定義によりますと、「人間とは弱いものだ、葦のようだ」そして「複雑怪奇な宇宙のクズのような、また怪物であると同時に尊厳で天使に近い、野獣から天使の間をいつたりきたりしている生き物」という趣旨のことを言っています。実存哲学者らしい鋭い考え方だと思います。

三 幼児教育の明暗

そういう人間育成の出発点でもある幼児期は、非常に大事であり、子どもは人間的に正しく保育される権利をもっています。人間が人間らしく教育される権利です。その幼少時にどういう人に出会い、誰にどう育てられるか、そこに重大な問題があるのです。

それが、今日、教育過剰爆発時代といわれる社会の中で、無保護か、過保護または人間育成の基本をあやまる無慈悲なこと、おためごかしのあやまちが平然と行なわれているのは、何と残念なことだろうと思うのです。

・可能性をみつめる目

このごろの幼児教育の明暗ということをも、もう少しつけ加えますと、五年前の「幼児の教育」(67巻 5号)誌に書きました「育ての心の再発見」ということです。そこでは、まず「雑草ともやし」という見出しで、今も変わらないA君のような例を引き合いにして書きました。第二の「子どもは生命である」という中でのべたことを改めて引用しますと、「小児科医の権威である遠城寺宗徳博士がよく言われることであるが、幼子の持つ生きる力を信じ、おおらかな謙遜な気持で子どもに接するのが、強い丈夫な子を育てる秘訣なのである。たとえば、母乳で育った子は、見かけは大きくなくとも生き生きとして、免疫その他の抵抗力が強く、暑さ寒さなどへの適応が人工栄養の子どもより強い。それなのに母乳栄養の子が年々減っているのは、

『幼い子の心の中に持っている力を信じない母親が多く、その他周囲のものの心がけが間違っていることによるのである。』
そして博士はこんなことも言っておられる。

『だいたい母乳は、生まれた時には、子どもが吸いついて吸えば与えられるという準備状態にあるもので、吸わなければ出ないのです。子どもが根気よく吸いついていく間に、二十日、一ヵ月たちますと、初めてたくさん出るようになります。したがって一週間以内に乳がたりないというのはあたりまえのことです。やっぱり、乳を出すという練習がなければ、といいま

すか実践をしなければだめなのである。ちょっと出が悪いからといっては、こんなことではやせてしまうからとか、時にはおばあさんの声援なども加わって、おおいそぎでミルクを買つてのませる。そうすると子どもは出にくいお母さんの乳を根気よく吸うよりも楽な、穴の大きいミルクの方に吸いついてしまうのです。出るべきもの、母乳がますます出にくくなる。それが母乳栄養減少の大きな原因になっていると思います。よく「親の心子知らず」と申しますが「子の心親知らず」ということもたくさんある。子をして言わせしむるならば、おそらく「お母さんたちあわてなざるな。もう少し私に吸わせてくれ。吸い出してみせる」というでしょう。こうした子どもの内にある母の乳房を吸って生存しよう、成長しようという生きる力を私たちは信じ、育てていくことが必要ではないかと思うのです」と。

何よりも最も権威ある確かなあかしは、事実です。明暗の事例がたくさんあるのです。私どもはその切なる声を代弁しなければならぬと思います。この領域は必ずしも私の専門ではないけれど、そこから出発した事実の因果関係が、私の専門の領域の方へなんとたくさんでてくることでしょう。

・人皆に美しき種子あり

子どもには開発されうる可能性が必ずある。どんな子にも美

しい種子があり、キラ星のようなものがあります。短期間にも大きく変わった例を先にもあげましたが、親で定めなら、幼稚園で、小学校で、更には中学校で、高校で、本人のもつ可能性をひき出し培い陶冶することが大切です。そしてだれとどう出会うかで、変わっていくのです。ところが、高校生の非行少年や問題児のことで高校の先生に、「もう少ししっかりやってくれなければ……」といいますと、「そういう基本的なことは中学でやることです」というのですね。中学の先生に言うのと、「そういうことは、小学校で身につけるもので……」という。なるほど、今その少年のケースに必要なごく基本的なこと、そして私が求めていることは、人生の九九（算数にたとえれば）みたいな、ほんの基本的なこと。そうなんです。ところが教育が責任を感じない。小学校の先生は、「やっぱり問題児は、親が……」と家庭に原因をおしつける。

だれでもそういいたいのでしょう。しかし、子どもというものは、仮に家庭が不十分でも、どこかの時点で、開発し教育すれば、朝に晩にかくもちがう、かくも変わるものだという事実がたくさんあるのです。教育とか人間育成とはそういうものだと思うのです。「はきだめにえんどう豆の花が咲く」、これは人世の事実です。「泥池に蓮の花が育つ」とも昔からいわれてきます。私どもの信念は、彼らとの出会いの根本は、「人皆に美し

き種子あり」なのです。必ず彼らの中にはキラ星のようにかがやく一点があるにちがいない。どこからか、萌えだす生命の力があるにちがいない。「明日は何が咲くか。やろうじゃないか」ということでなければならぬと思うのです。

はきだめにえんどう豆咲き

泥池から蓮の花が育つ

人皆に美しき種子あり

明日何が育つか。

―安積氏詩集「一人のため」より―

四 問題提起として

・教育の源流にかえろう

親や保育者が、人間をどうみるか、人間観、人生観は何か、自分の生き方をどう考えているか、ということを自らに問い、お互いに問いかわすということが、幼児教育、家庭教育のはじめだと私は思います。

中世と近世、あるいは封建社会と近代社会の子ども観のちがいをみてみますと、中世は、子どもを「望遠鏡を逆にして見るおとな」としてしか見なかったという。近代はそれとちがって「子どもを子どもとして見る。子どもを見るめがねで見る」ということであろうと思います。戦後わが国では、少しいき過ぎ

て子どもの世界を見る目を拡大しすぎて子ども中心になりすぎ、親の姿勢がくずれたという感もなきにしもあらずですが……。

しかし子どもの世界をおとなの型やわくにはめないことが大事です。ペスタロッチやフレーベルが子どもの尊重を説き、ピアジェが子どもの世界を拡大し、フロイトに学んだニールやホーマーレインが児童中心を唱えたことを、改めて正しく再認識してみるべきでありましょう。アーノルド・ゲゼルの人類の歴史になぞらえた人間の（幼時から青年期までの）発達史も大いに学び直してみるべきでしょう。

私が、あえてそういうことを前提としている注文し皆さんに申し上げるのは、今日、子どもの真のニードがゆがめられ、子どもの世界が奪われ、こわされているからです。一面には、子どもへの過保護、もやし化現象。子どもの欲望の方にひっぱりまわされて、真の子どもの人間としてのニードは害されている。人間教育がなされていないのかと感ずるのです。フラストレーション（欲求不満）ということだけおぼえて、トランス（耐性）が忘れられている。「おあずけの味」がわすれられているのです。欲求不満を与えないということも大事でしょうが、時には待つ心、ガマンする心、おあずけがなくてはならないと思うのです。やすきにつくは人のならいで、欲望が満たされるくせがつくと限りがなくなるものです。そういう傾向

の今日なのに、実は子どもの自然として、もっとのびのびさせ泥んこ遊びをしたり、びしゃびしゃ水遊びをしたり、山をかけたまわることなどの経験させない傾向が多すぎる。きたない、あぶないと禁止している。のびのび体験させ与えるべきものを抑圧し、おあずけすべきものを与えすぎる。逆だと思ふのです。ちっとも科学的ではありませんね。子どもを子どもと見、子どもの世界を拡大尊重したこの道の先覚者たちの子ども観は、そんなことのためではなかったはずで、まこと子どもの真実に沿った人間育成のため、真のニードに沿うような人間教育のためのものだと思ふのです。

そこで、今日の話の第一の結論は、幼児教育のまことの原点に帰れということです。倉橋惣三先生の理論（いろいろ批判はありましようが、わが国の近代的幼児教育の出発点）に帰ろうということです。

ペスタロッチ、フレーベル、ニール、ホーマーレイン、ピアジェあるいはゲゼルなどの先覚者たちは、子どもを本当によく見つめ、愛していたと思います。その愛こそが大切です。そこから生み出された学説が、その後の人々によって、科学の名のもとに誤解されてはしないかと思ひます。たしかにそうだと気がいたします。

同じような意味で、わが国の幼児教育、家庭教育の先覚者で

あつた倉橋惣三先生も、正しく理解されていないように思われるのです。もう一度倉橋精神、その心を再発見して現代に生かすことが要請されていると思うのです。

・ 眞実の人間の声を聞く

第二のことは、人間のいちばん限界状況とみられる、いちばん底辺におかれている人、いちばんむなしいとみえるところにある人々にライトをあてて、そこにこそ眞実の人間の声がある。その声、その訴えに耳を傾けよう。そこから人間の希望を、可能性というものを見てみよう、その必要があるということです。

私の専門の世界でいえば、重度精薄者、非行少年、更には死刑囚、癩患者、テプレシブ（鬱病の人）等々です。おもえば、私もその人たちと同じ人間としてここにいるのではないかと、という思いでいっぱいなのです。かえって、こっちの方が業がふかいのではないかと。そういう自覚から出発したい。このごろの世の中では、人のいたみを感じない人が多いですね。名付けて「イタクナイイタクナイ病」という。他人がどうであろうと、わが身、わが家庭に痛みが及ばなければ、痛みを感じないということです。ところが、死刑囚、非行少年、あるいは人から忘れられ、すてられ、顧みられない人々が、自分の痛みの体験を通じて人の痛みを感じているのです。他の痛みがわかるのです。お偉い人々よりはるかに人間的だと思うのです。

「人の痛みを痛みと感ずる」「よろこびをよろこびとする」というのが、本当の人間性の原点ではないでしょうか。そういうことが、かえってどん底の中にいる人たちにあるということ、しみじみ感じいつているわけです。

島秋人という死刑囚（以前「幼児の教育」にも書き、このたびの「人間の復興」の中にも書きましたが）がおりました。幼時から不幸な、人とうとまれる生活のあげく、やみからやみの生涯を送った、死刑囚です。その人が中学時代、一度はめてくれた絵の先生を思い出して、その先生に手紙を出したというのが、彼の新しい生命への転機となりました。光から光への転換でした。その彼が、三十三歳にしてこの世の生を断頭台に終わる時に言ったことばは、次の祈りでした。

「精薄と呼ばれて人がうとまれることのない世の中のきたりますように。貧しきがゆえに人がうとまれることのない、そういう人にこそ眞の教育が与えられますように。死刑が廃止されても犯罪なき平和な世の中がうちたてられますように。私にもましてつらき立場の人々の上にこそ、神の恵みがありますように。……」

私は、島秋人のこと、彼の歌と祈りに少しでもこたえることのできる「鎮魂」の生涯をこれからいたしたい。そう決心したのです。少年保護とか人間教育を考える時の原点としたいと思

い立ったのでございます。

また、私はゴリキーの「どん底」の中のセリフがとても好きなのです。

あの作品は、人生に対するスラブ民族のそこぬけの楽天性とふかい哲学性を、暗いどん底の中で見せています。その戯曲の第四幕にサーチンという人物が登場します。大変ユーモアのあつんだん底の生活をしている労働者、そのサーチンという人物に言わせているゴリキーの人間観ですね。

「いっさいは人間の中にある。いっさいは人間のためにある。こいつあすばらしいや。だから人間を尊重しなくちゃいけねえ。あわれんじやあいけねえ。憐憫をもつて考えちゃいけねえ。大事なことは、もっとお互いにいい人間になることだ。お互いに生きているということなんだ。この人間のために乾杯」というセリフです。

人間は尊重しなければいけない。あわれんではいけない。「おかわいそうに」なんていうのはいけない。人間は尊重さるべき存在だという。すばらしい思想だと思います。

とりわけ今日の日本の教育や児童観に対しては頂門の一針とすべきでしょう。「それころぶ、それあやうし」という過保護も、「おかわいそうに」などという浅い憐憫の情も、もっと深く考え直してみなくてはならないのです。あわれまれたり、おた

めこかしされるような存在では人間はないのです。尊重され、敬愛されるべきものだということ。それが人間教育のかえるべき、あるいは出発とすべきところだと思ふのです。

あのすばらしい目をした、あの輝やかしい、ふればこぼれるような、幼児の前に、われわれは静かに立って、子ども心とリズムを通わせたいものです。ゴリキーの「人間」というところに「幼な子」という言葉をあてはめて、幼な子のために乾杯したいと思ひます。

五 この小さきものへの賭け―結びとして―

最後に、私の過去を総括し、前へ進む道程の一里塚とも思つて世に問うたと申しました「人間の復興」の終りの方の部分を引用させていただきます。

「現代のような情勢下でも、子どもと若者と大自然との火花の散る出会いとハーモニーの中に、人間の未来の座標を確認する一つのよすがを見つけることが可能ではないかと思ふのです。回復された自然と若もののエネルギーさえあるならば、未来は必ずしも暗いばかりではない。日本の将来にそれほど絶望しなくてもよいのかもしれない。そんな風にも思ふのです。幼児や若者のエネルギーに正当な座を与え活路を用意する。希望のある生き甲斐を実感できる場を備える。そのことがさし当たつ

て一番大切な明日の社会への起点となるのではないかと思うの

です。教育の父ベスタロッチの名は、スイスでは日本と大変ちがった響をもっていると言われます。「あいつはベスタロッチだ」ということは、「あいつは少々ぬけている、馬鹿げたことを、こりもせずやり続けている」というような意味に使われるそうです。これは大変面白いと私は思いました。計画も下手だし、事業もあまり成功しない。ただ子どもが好きで、社会問題や人間の未来のことも、一切をあげてすべて目の前の子どもたちに賭けている。彼の生涯が、馬鹿げて見えるくらいだったのです。う。思うに、近代の人々にはあまり利巧になり過ぎ、結局あまり聡明でないみたいです。これからは、人は少し馬鹿になり、あいつはベスタロッチだといわれるようになって、子どもや若ものに賭けていいのではないか、それが大切なことではないかと思えます。私も、つとめてそういう抜けたものになりたい、そういう愚かな賭けをし続けていきたいと念願いたすのであります。」

先人にならって、この賭けを勇氣と希望をもってやりつづけてまいりましょう。

福音書の中にこういう言葉がありますね。

『このいと小さきもの一人に為したるは、即ちわれになしたるなり』。私は、この聖句を馬鹿正直に信じてまいりたいと願っ

ている者であります。

恥さらしのような自分の幼少時や、親馬鹿のような告白から始めた今日のこの講演も、実はこの最後の言葉を申しあげるためのものだったという感がいたします。皆さまがもし共鳴してくださって、一緒に味わい、「人間を育てる」仕事の力の泉としていただければ幸いです。

(東京家裁判事 お茶の水女子大学講師)

—一九七一年六月・現職研究会・講演—

昔話のユング的解釈・その一 ——怠け者の話——



河 合 隼 雄

はじめに

今年の三月に、お茶の水女子大学児童学科において、おとき話に対するユング派の観点からの解釈について、集中講義を行なった。

このようなことは前々から興味をもっていたが、他に発表する機会もないままでいたら、お茶の水大学からの要請があったので、話してみる気になった。ところが、風邪で寝こんでいたことや、考えが明確になり切っていない点もあって、準備不足のままでも勝手なおしゃべりをしてしまうようなことになってしまった。全く申し訳ないことと思っていたら、凶らずも、児童学科の本田和子先生より、講義のテープを児童学科の学生さん

たちが文字にしたので、その一部を本誌に発表してはという依頼があった。

前述したようなわけで、筆者としては、このようなものを発表するのは恥ずかしい気もするが、児童学科の方々の折角のご好意を無にすることも申し訳ないし、少し訂正して発表させていただくことにした。ずいぶんと脱線してつまらぬことをしゃべったり、大たんなことを不用意にのべたりしているが、折角、逐語的に文字化してくださったお気持ちもくんで、なるべくそのまましておくことにした。この点、読者の方のご寛恕をお願いする。

なお、集中講義の一部をここに発表させていただくので、おとき話の研究についての歴史や、ユング派の考えや方法論など

については省略することになるが、いずれ、このあたりのこと
も明確にして、形をととのえて発表したいと思っている。

このような機会を与えてくださった、お茶の水女子大学児童
学科の方々、特に、津守真、本田和子の両先生、および、筆者
の早口の講義のテープを文字化してくださった学生さんたちに、
心からお礼申上げる。

怠け者の話

今からする話は怠け者の話です。(笑い) おとき話の研究法
としては、一つのおとき話について徹底的に研究する方法、そ
れからも一つの方法として、怠け者なら怠け者という一つの
テーマについて、それを調べていく方法があります。

今から言う「怠け者」の話というのは実は私がユング研究所
におりました時、分析家の資格をとるためにいろいろな試験が
あるのですが、その中におとき話の研究という科目がありまし
て、試験を受けたりレポートを書かされたりするのですが、そ
の時書いたレポートなのです。なぜ怠け者を選んだか皆さんわ
かると思います。私自身怠け者です。なかなかよいレポート
を書けなくて困っていたのですが、結局のところ、怠けること

はよい意味があるんだということを立証しようとして(笑い)
一生懸命書いた、そういうレポートです。

さて、昨日から言っていますように、おとき話の中では、良
いやつは良い、悪いやつは悪いと非常にはつきりしていますね。
だから中にはおとき話というのは非常に教訓的の意味があると思
っている人があります。つまりわれわれの知っている言葉でい
うと、特に徳川時代にそういうことはとり上げられました。が、
勸善懲悪ということがありますね。勸善懲悪ですべてのおとき
話ができていると思っている人がありますが、それは大間違い
です。悪者が大いに栄えることもあるのですね。たしかに、儒
教の影響を受けまして、勸善懲悪的な色彩というのはおとき話
の中にたくさん入っています。もちろん、時代時代によって変
遷してきたのだと思いますけれど、みますと全然勸善懲悪的で
ない話もあります。たとえば日本の昔話でしたら『ばくろうや
そ八』というのがありますね。ばくろの好きな話ですが。ばくろ
うのやそ八というのが悪いことばかりしてましたりなんかい
っぱいして、最後に長者になりましたで終わるわけです。つま
り、悪者の成功する話なのです。

その一・勇敢なるチビの仕立屋

次に、たとえばグリムの『勇敢なるチビの仕立屋』というのを知っていますか。ほとんどの人が知っていると思います。『勇敢なるチビの仕立屋』というのは、一打ち七つというやつです。小さいチビの仕立屋がはえがあまりとまるので、バーンとやったら一遍に七匹やつけたのですね。なんとおれは勇敢なんだろうと感激して、ここに「一打七」というしるしをつけて旅に出かけるのです。そこはまあ日本と違うところで、日本だったら一打七匹、と書いたら人間でないことがわかるのですが、西洋にはそんな匹、などというのなから、みんな七人やつけたと思うんですね。すごい勇者がやってきたと思って間違われて、その誤解を利用してだんだん偉くなっていくのです。ところが、考えてみるとあのチビの仕立屋は、敵をやっつけるためにうそでだますか何かずるいことをするか、そんなことばかりやっているのです。何も勇敢でないのですが、結構勇敢だということとちゃんと成功していくわけです。そんな話をぼくら子どもの時読むと、ものすごくおもしろいし、チビの仕立屋のやることに大喜びしたわけです。しかし、考えてみると、うそをついてはいけませんということが大切だとすると、チビの仕立屋なんて大うそつきの太ズルだということです。

おとぎ話の主人公というのは非常にずるいことをして、だま

したりしますが、そういうことに皆ほとんど心がとがめない。そしてうまいこといきよつたと思つて喜びますね。ところがこんな勇敢な仕立屋などはものすごく悪いやつじゃないか、うそをついてはいけないということをどう考えるのか、つまりよいやつはうそをついてもいいけれども、悪いやつはついたらいけなひのか、などという質問をする子どもがいたら皆さんはどう答えますか。もし聞く子があつたらなかなか頭のいい子です。時々そういう子がいます。ぼくはおとぎ話が好きなんですけれど、時々非常に不思議になつてくるのです。こんなもの皆喜んでるけど、主人公を悪人と考えられないのか、その点を考えてましたら、つじつまがあつていふようであつていない話がたくさんあつて、それが不思議で不思議でしかたがなかつたのです。

その二・三年寝太郎

さて、その一つの例として、怠け者がむちゃくちゃに得する話というのがあります。たとえば非常に有名な話ですけど、みんなが知っている『三年寝太郎』というのはその最たる話です。『三年寝太郎』はいろいろなバリエーションがありますが、簡単に言いますと、昔あるところに二軒の家が並んでいた。東の家はたいした大尽だいじんであつたが、西の家は貧乏でごく小さなあ

ばら屋であった。西の貧乏屋では父親が先に死んでお父さんがいないのです。母親と一人息子がくらしていた。この「母親と一人息子」という組合せは、昔話によくある話で、明日の講義でもそのテーマが何遍もでてくると思います。母一人子一人というのは本当に大切なテーマですね。で、母親と一人息子とが住んでいた。その息子は大変な怠け者で、毎日毎日何もせず、ただ食っちゃ寝食っちゃ寝してばかりいたので、世間ではその息子のことをクツチャネと呼んでいた。(笑い) ドイツ語みたいな名前ですけど(笑い) 母親も見るにみかねて、「われもい加減にかせがないば困るじゃないか」と時々世話をやいてみたが息子はその度に、なあにおつかあ、これでもかんべん(考)えのことです(ね)があるんだといって相変わらず食っては寝てばかりいた。と、こういうふうにもものすごいものぐさです。

この『三年寝太郎』とか『ものぐさ太郎』という話はご存知でしょう。食べようと思つたみかんが手からころげ落ちて、ころころ転がってそれをとるのがうるさい、通る人がとってくれないかと、待っていた有名な話があります。実際われわれも同じで、皆さんはどうか知りませんが、ぼくは完全にそうです。仕事をしている時に、字引をひけばわかるのに、それが手の届く範囲になかったら、その字引をとるかとするまいかと思つて一

時間ぐらい考えます。それをひいたらわかるんだけど、それもうるさいし、誰か子どもにでもとつてもらおうと、大きい声を出して呼ぶのもじゃまくさいし、来るかなと待ったりするうちに一時間たつて、そしておもしろいことには、字引をとるかとするまいか一時間ほど考えているけども、ちよつとお茶でものみたいなと思つたらざーっと下に降りていって(笑い) また二階へ上がつてきてすわる。あつ、しまった、字引をとるのだつたと思つても、もうすわつてしまつたら終りですね。また機会があるまで待つていなければならぬ。だからぼくはそういう気持ちには非常によくわかります。こういう気持ちのわからない人は、この話は全然わかりません。みんなある程度わかると思っています。それほどひどくはないにしても、ある程度、そういう気持ちには人間である限りあると思います。

ところが、この「くつちゃね」の男が二十一歳になると大活躍します。どうなるかといえますと、二十一歳になつたらお母さんに烏帽子と神主の服を買つてきてもらうのです。そして烏帽子をかぶつて、ちゃんと神主の格好をして、そして東の大尽、大金持の家にそつとしのび込んで神棚の上にあがつて隠れておるのです。そして夕飯時にドスンと飛び降りる。そして、おまえはいったい何者かと尋ねると、そのクツチャネがですよ、

つくり声をして、おれはところの氏神だと。きさまのところの娘と西の家の息子とはできるときから祝いあわせてあるによつてすぐに夫婦にしろ、もししないならば二人を黒土にしてしま

うぞと言うわけですね。それで皆驚いている間にさあつと逃げ
て帰ってくる。で夜が明けるのを待ってその大尽の家では、す
ぐ西の家へやってきて、こういう氏神の言い伝えだから、おま
えの家へうちの娘をもらってもらいたいというわけです。西の
家のお母さんが非常に驚いて、あほもない、こんな貧乏な家へ
東の家の娘なんかもらえるものではないというけれども、東の
家ではぜひにもらってくれ、なんぼないでも、もらってくれん
と黒土にされて困るから、おまえの家もつくってちゃんとする
からというわけで、そういういますと大尽の家から大工がやって
きてどんどん西の家をこしらえて、立派なご祝言をします。そ
こでこのクツチャネがお母さんに「どうだおつかあ、おれはう
まいかんべんをしつらあ」といいました。それで終りです。(笑
い)

考えたら三年寝太郎のやつが、最後に大だましにだましてじ
ょうずに結婚をするのですね。だから勸善懲惡の考え方をした
らこんなサボリの嘘つきが、こんなよい娘さんをもらうはずが
ないじゃないかといったって、もらっているんだからしょうが

ないです。もらいましたと書いてあるんだから。だからそうい
うふうに考えますと、そんな怠け者が得をするだろかと思うけ
れどちゃんとあるわけです。

その三・水木の言葉

あるいは「水木の言葉」という話があります。このはじめを
読んでみますと、昔あるところに無精な若者があった。毎日ぶ
らぶらしていた。ある日柿が食べたくなつたが、木に登つてと
るのもいやだし、柿の木の下にいたら落ちてくるかもしれない
と思つて、むしろをしいて仰向いて口をあけていた。(笑い)こ
れも非常に共感を呼びますね。(笑い) こういう無精者が主人公
なのです。すると西の方から鳥が一羽飛んできてとまった。ま
もなく東の方からも鳥がとんできた。そして庭の鳥が世間話を
始めた。おれのいる町の長者殿は大病だ。庭に植えてある大き
な水木が血を吸っているためだが、誰も知らない。情ないこと
だ。あれさえ切り倒せば長者殿の病気はすぐ治るのだという世
間話を、この怠けものが聞いて、そして長者殿のところに行き、
うまくいって、大成功する話です。この大成功する話の主人公
は大いに無精者で柿の木の下に口をあけて寝ていたわけですね。
こいつが大成功するのです。そうするとこのように、怠け者が

成功している話もでてくるということは、さっきから言っていますよ。簡単な考え方では理解することができないことがわかります。

その四・ものぐさの糸繰り女

ところで、このような怠け者の話というのは、グリム童話にも大分あります。たとえばこれも傑作な話ですが、これは女の怠け者です。(笑い)『ものぐさの糸繰り女』。これは『眠りの森の美女』についての講義のときにも話をすると思いますが、糸を繰るということは童話のお得意のテーマです。この糸を繰るということは何だと思えますか。これほどよく出てくるこれは、運命の糸を繰るという意味で、運命の女神というのはよく糸を繰っています。だから、糸繰りというのは女性の非常に大事な仕事です。そういう象徴の意味もありますけれども、一般の女性の仕事として、糸繰りをするということは実際的にも絶対に大事だったわけです。女の人が糸繰りをしてくれないことには、皆着るものがないわけですから。昔は、夜なべというのがあって、日本人だったら夜にわらじを作ったり、ぞうりをつくる。足袋のやぶれたのをつづるのとか、そういうのが女性の仕事としてあったのです。そして、糸繰りということも非常に

大事な女の仕事なのです。

日本の話でしたら『天邪鬼』の話なんかありますね。あの中で、糸繰っているところがあるでしょう。日本の話でも糸を繰っている娘とか、はたを織っている娘がよくでてきます。あるいは鶴女房でもはたを織ってますね。このように女性として絶対やらなければならない、糸繰りがきらいなものぐさな女がいたということです。それがグリム童話一二八番『ものぐさの糸繰り娘』(die faule Spinnerin)という話です。

亭主と女房がいて、女房の方はとてもものぐさで、いつも何もしないでいたものだと思っていた。亭主がつむぐんだぞと行って渡したものをすっかりつむいだことなんかなくて、つむいだものでも巻きとらずにみんな糸巻きざおに巻きっぱなしにしておいた。で、こういうふうにしてサボってばかりいるのです。亭主が小言を言いますと、口だけは達者で、いったいどうして私に巻きとってくれというんだと言う。わくがないんだから、さっさと森へ行ってひとっこさえてくれというわけです。それほどいりやうなものならといって、亭主がわくにする木をとるために森に行こうとします。ところで、亭主が森へ行っちゃんとわくを作ってくると、この女の人には働かなければいけないわけですね。だから亭主にそういったものの亭主がわくを

取りにいくと心配になってきます。

ところがこの女はうまいこと考えついたので、こっそり亭主の後へついて森へ出かけていった。そしてその亭主が木に登って材木を選んで切ろうとすると、女房は下の方のみつからないようなやぶの中にもぐりこんで、大きな声で上の方に向かって呼んだ。「わくの木を切るやつは死んじまう。わく取りするやつあくたばるぞ」(笑い)亭主は聞き耳をたててびっくりした。

何だと思うんですね。ところがまた繰り返しのです。三べん繰り返します。なんべんもこう「……」というんで亭主はびっくりして急いで木から降りて帰ろうとした。その間に(ここがおもしろいですよ)女房は必死になって走って帰ります。(笑い)これは非常に大切なことですが大体怠け者というのはずごく仕事をするときがあります。(笑い)そして、亭主より先に帰って何くわぬ顔をして家にいるわけです。そこで、亭主に「おい、わくを持ち帰ったか」ときくとだめだったという。わくをもつて帰らなければどうも困ると女房はいうんですね。

ところがまもなく、亭主は家の中のだらしのないのがどうにもこうにもやりきれなくなってきた、文句をいうのです。「つむいだより糸が巻き竿に巻きっぱなしになっているのは、やっぱりみっともないなあ」どうだろうね。お前さん」と女房は言っ

た。「どうせわくが手に入らないんならお前さんが屋根裏に上がつて、私が下にいて糸巻きぎおを放り上げるから、お前さんがそれをまた投げ降ろすのだ。そうすりゃ雑作なく糸ができてしまふぞ」うん、そいつはいい」と調子よく言った。そんなわけで仕事が片付くと亭主が言った。「より糸の方はこれで片付いた。今度はより糸を煮なきやいけない」女房はまた一苦勞で、さっそく朝早く糸を煮ることにしようと言ったものの、また新しいいたずらを思いついた。朝早く起きて火をおこしてかまをかけた。ところがより糸のかわりに麻くずの固まりを入れていつまでも煮っぱなしにしておいた。それからまた、寢床に入っている亭主のところに行って亭主に向かって言った。「私はちょっと出かけなくっちゃならないから、その間に起きてかまに入れて火にかかっているより糸を見てくださいよ。だけどちゃんとき分についてみないと、より糸が麻くずになっちゃうからね」亭主は用心して遅れちゃいけないと思つて、あわてて起きて大急ぎで台所に行った。ところがかまのところに行って中をみると、麻くずの固まりしかみえないもんだからたまげってしまった。で、気の毒な亭主は息を殺してもとも言わず、自分がぐずぐずしてたからだ、自分のせいだと思つてそれからというもののはよ

り糸やつむぐことは一言も言わなくなった。(笑い)

これがドイツのお話ですから感激しますけれど、ところがね、それからがおもしろいのです。終りに一言ついているんです。

「……だけどね、こいつは性悪女だったのさ」まさに感激すべき女性ですね。サボリをやり遂げるために大活躍するわけですから。(笑い)ところが、こいつは性悪女だと書いてあるのですね。作者がそういつている。お話のあとに一言ついているわけです。「性悪女だった」だから言ってみれば、これが特別性悪な女で、こんな性悪に皆さんなつては困りますよとか、こんなことはめつたにないので、これは特別性悪だから成功したんですよというような意味が含まれています。これはおそらくもとの話にはついてなかったと思います。だからおそらくグリムがつけたか、あるいは世の中には必ずこういう人がいるもので(笑い)自分とはともかく他人はサボってはいかんと思っている人(笑い)がたぶんつけたと思います。

おとぎ話のワケ

ところがこういふのがつかずに、いっばなしの話と、ついている話とがある。こういうところがおとぎ話のおもしろいところで、おとぎ話にものがついたり減ったりするのです。ついで

に言っておきますと、おとぎ話の終りにこのようなのがつくのがちよいちよいあります。簡単に言いますと、「だったのさ」というのもこれも付け足りですね。たとえば、そこで一寸法師は、めでたく結婚しましたと、さという。「結婚しました」ではなくて、「とさ」ではちよつと違うんです。どう違うかというところ、そういうお話がありましたとき……。しかし……ということですね。しかし、今の世の中はということにちよつとながるわけでしょう。それから中にはこんな例もあります。たとえば「こういうふうに王子さまとお姫さまは非常に幸福に暮らしました。しかしこの世にはそんな幸福なことはいらないと思いませんか」そんなのがついているのです。あるいは中には語呂合わせのみたいのが最後についています。「なんや話はべつた」とか「もすこし米ん団子、早う食わにやすえる」などというのが終りについていきます。これはなぜこんなのがつくのかわかりますか。

これはどういふことかというところ、これはおとぎ話の國、おとぎ話の世界と、みんなが住んでいる世界は違うんだから、おとぎ話ですんだ後みんなが自分らの世界に帰りやすいためにひつけてあるのです。そういう配慮があるのとないのとあります。が、映画でもそういうのがあるのに気付きませんか。そういう

ことをつくづく思ったのは、どうも古い話ばかりするので年がわかりませうけれど、ぼくが感激してみた映画に、たとえば「汚れなき悪戯」というのがあります。マルセリーノというものすごくかわいい坊やがいたずらをして天使になって昇天するお話です。そして最後にお前はよい事をしたので何か願いをききとどけてやろうと、神さまが言う、「お母さんのところへいきなさい」とその子がいます。これはどういふことかと言ったら「お母さんは亡くなっていましたから」結局死ぬことです。そしてその子は死んでいきます。

これがすいお話だということの一つは、死ということが少年の一番大切な望みがかなえられる形としておとずれるということです。ぼくらは死にたいと思っていませぬ、お願いするといったら、長生きさせてもらいたいとか、なるべく死にたくないというふうに思っているぐらいなのに、あのほんとにきれいな坊やが一番の願い事としては、お母さんのところに行きたいといひます。もしたらお母さんのところに行かしてあげようという形で、実際はそれはお母さんのところへ行くといひ方でもできるし、違う言い方をすると、あの坊やは小さくして死んでいったという言い方ができるわけです。つまり我々俗世界の人間がいうと天折ということになるし、それを天使の世界で言

うと、あの坊やは偉かったので非常に早く母親のところへ行けたといひ方ができるのです。そういう事を描いた映画として、最後の坊やが死んでいくところというのはものすごく感動的で、ぼくらは涙がいっぱい出て感動するのですけれど、そこで映画は終わらないのですね。

映画では、そういう話が実はこの寺院には伝わっておるのですよといふふうになって、それからその話を聞いた人がぞろぞろ帰っていくところが、写るのです。そして終わっていくのです。考えたなら、そんなアホなと思うでしょ。そんなのいらぬじゃないか、坊やが死にますといふところで、昇天していった方が見えて、皆がわあーと泣いた所で、ぱつと終わられた方が、はるかに終りとしては感動的ですね。そんな話がありましたときと云って、その話を聞いた人が帰っていくところなど必要ないと思いませんか。そこで、僕が考えたのは、なるほど映画というのはうまくできている。このあいだにみんな涙をふくようにできている。(笑い)ここで終わったら、カッコ悪くて、しょうがないですからね。(笑い)一緒にいって来た人に、涙を見せようにして、皆この間になくわんような顔をして、涙をふいておもしろかったと言ふのです。(笑い)

このような言い方もできますけれど、結局どういふことかと

いうと、さっき、僕が言いましたように一人の死ということ、死に去って行く死というのではなく、あのように選ばれた、あの少年はだれよりも早く母親のもとに、あるいは、神のもとに召されていったのだというのは、すごいすばらしい考え方です。けれども、あんまりその考えにぼくらがいかれたら、どうなりますか。ぼくも今日限り、お母さんの所へ行かなければならない。それはこわい。そうじゃなくて、やっぱり人間である限り出来るだけ長く生きたいし、ぼくら、亡きお母さんの所へ行きたいと言ったって、一方ではなるべく行かんで生きていたいというの、われわれのリアリティーです。外的な現実（outer reality）とごっこいいでしょう。それに対して内的現実（inner reality）という方からみると、さっき言いましたように、死というものはそれだけ、すばらしいものに見えるんだけど、そういうすばらしい考え方だけで、われわれは生きて行けません。こういうすばらしいお話を聞いて、その後で、われわれは俗世界の中へ帰って行くのです。ということをはっきりとさせたいわけです。そう考えると、作者の意図がわかります。

小説でもお話でも、ワクのあるのがあるでしょ。そのワクのあるのをワク物語といいます。このワクというのがついていないものもあります。この場合でも、『物ぐさの糸繰り女』とい

うのは、あんまりえげつなくだましすぎるので、どうしてもワクをつけたくありません。しかし話としては、この場合ついていない方が、僕は好きですけれど。どうですか。しかし子どもに話をしていたら、つけたくなるでしょうね。子どもが喜んで、ワァー、私もそうならうかしらなんて言われたら……。だからこの辺は、なかなか微妙なところです。最後の部分をだれが付けたのかわかりませんが、ともかく『物ぐさの糸繰り女』というこんなおもしろい怠けもの話が、ちゃんとグリムにあるのです。

怠け者の話 その五・二人の無精もの

ところで、このような怠けもののお話を、楽しんでいるようなものがあります。日本の童話でいいますと、『二人の無精もの』というのがありまして、これは非常に簡単です。読んでみますと、昔々ある所にずくなしの男があった。おかみさんににぎり飯をこしらえさせ、それをくびにくくりつけてもらって、ふところ手をして、町に用たしに出かけた。お昼ごろになって、おなががへってきたけれども、ずくが無いもので（おもしろい言い方ですね、無精ものだからですね）ずくが無いもんで、にぎり飯を首から取ることがいやで、誰か来たらとってもらおう

と思つた。この辺よくわかりますね。そのまま向こうの方へ行くと、大きな口をあけた男がやつてきた。アッ、誰かくる。あんなに口をあけているところを見ると、よっぽど腹がすいているにちがいない。あの人にたのんで、にぎり飯をとってもらいましょうと思つて、「もしもし、私は首におにぎりをゆわえつけているが、手をだしてほどくずくがない。おまえさんがとつてくれたら、半分だけ分けてあげる」とたのんだ。すると口をあいた男がどう言うたかという、「私はさつきから笠のひもがとけてこまつているが、そのひもを結ぶずくがないので、誰かに結んでもらわんと思つて、口をあいて笠をブラブラとさせている」と。(笑い) こんな話もあります。

これではまるつきり、怠けもののお話を楽しんでいる感じですね。ただし、この二人の男は無精者でしたなどと終りに何にも書いていない。こういう話を聞いたら、誰だつて笑いますけれども、いったい何のためにあるかという、こういうふうな簡単な話というのは、それこそ、フロイトが言いますような考え方、願望充足という考え方で、簡単に説明できると思つてつまり、日本でもドイツでも、(ドイツという国は、いろいろな意味で日本とにている所が多いです) 勤勉をとうとぶ国です。実際はもう日本の女性たちは、はるかに勤勉でなくなりま

した。しかし、その女性の勤勉さというのは、ドイツ圏にはまだ残っています。われわれはスイスに行くと、ほんとに感激しますね。まだこういう女性がおつたのかしら、と思つます。大抵、汽車や電車に乗ると、毛糸なんかをあんでいる女の人が、ものすごく多いです。大体その毛糸をギャーギャーと、あんな機械で(笑い) ああいう無粋なことを考える女性は先ずいませんね。みんな手編です。いろいろな編み方があつて。お互いにお母さんから伝わったり、おばあさんから教えられたり、近所の人に習つたりして、たくさん編んでいます。さつき言いましたように、女の人と、スピネンIIつむぐということは、切つても切れない伝統としてまだまだ残っています。日本ほどこれだけ単純に伝統というものをかなぐり捨てて国はないようです。そういう意味では、皆さんもスイスに行つて見て来てほしいです。そういう勤勉に仕事をやりぬくということが、今でも残っています。その点フランス語圏の方は、やっぱり違います。フランス語圏の方へ入ると、楽しむことが、非常に大事なことです。だから何とも言えん陽気さとか、楽しさとかがありますけれど、ドイツ語圏の方に行きますと、みな仕事をしなければならぬ、勤勉にやらなければならないという感じが強いです。

その六・三人の糸繰り女

さて、おとぎ話というものは冬のものです。冬暗くなってもう外で仕事ができないので、中へ入って、日本であればわらじを作るとか何かしていると、口の方も動いて、うまい人が話を始めますね。するとさっきの「ずくなし」の話なんかきいて皆ワッと笑う。これはつまり、皆一生懸命働きながらも、心の片すみではそれだけサボったらどれだけ楽しいでしょうという気持ちをもって。世の中にそんな男がいるのかな、そこまです徹底すると楽しいだろうな。そういうふうな意味あいをもって、さっきの怠け者の糸つむぎ女とか、この二人の怠け者の話などが生じてきたと思います。

このような類のものとして、グリムからもう一例あげます。『三人の糸繰り女』というお話です。怠け者で糸つむぎがきらいで何もしない女の子がいた。あんまり怠け者で糸つむぎがきらいお母さんが一発くらわすとギャッと泣き出した。あんまりギャーギャー泣いているので、そこへ通りかかったお妃が、なぜ泣いているんですかとたずねた。お母さんがごまかさなきやいかなと思つて、いやこの子は糸つむぎが好きで好きであんまり糸つむぎばかりするので、たまにやめとけとおこつたら泣いて

いるんですというて、逆をいうわけです。(笑い) したらお妃が感激して、そんな働き手の女の人がうちでも欲しいと思つていたから、すぐお城へ来て糸つむぎをするようにと、お城へ連れていかれるのです。

そこで、あんたの好きなだけしなさいといつてへや中につむぐ糸を置かれ、やらされることになって、糸つむぎがいやで泣いていた。したら三人の女の人がやって来た。その三人の女は糸つむぎが好きで、糸をつむぐために足でふむので足がものすごく大きい女と、糸をなめるから口びるが無茶苦茶に大きい女と、それからもう一人、糸をまわすために、幅広い指をもつた女とであった。その女たちが糸つむぎは好きだから代りに糸をつむいでやるけれども、全部つむいでやったら、あんたはお妃にほめられて、おそらく、王子さまと結婚せよということになるけれども、その結婚式にわれわれ三人を必ず、招待することを約束してほしいのです。そこで約束すると、三人が見てるまに、バーツと仕事をしてのけます。そしてやってしまつて帰つたあと、お妃が出てきてものすごく感心して、こんなたくさん糸をつむぐ女だったら、王子の嫁にもらいたい。そして結婚式になるのです。結婚式になったら、すごく変てこな女の人が三人やつてくるのです。ここが話の一つの頂点です

が、さきほどの怠けものの娘が、平気で三人を呼び入れます。これは私の三人のおばさんで、前から結婚式には、招待する約束だったので、絶対に来てもらわなければいけません。

するとお妃がなんとという変な女たちが来たのだ、あんたはいいたいどうしてそんなに、足が大きいのかとたずねます。「これは踏むからさ」あんたは何でそんなに口びるが大きいんですかと聞くと、それは糸をつむぐ時に「なめるからさ」とこういうわけです。そして、幅広の拇指の女は「糸をまわすからさ」といいます。もしたらお妃がびっくりして、やっぱり糸をつむぐということは大変なことだ。もしもうちの王子の嫁がそうなたら大変だから、あんたは今日限りつむぐことをやめなさい。(笑い) つむぎたいんでしょうけれど、これからはやめなさいということになって、めでたく結婚しました。(笑い) これも怠けものがすぐく得をする話です。

この話にも、願望充足の意味が入っていると思います。糸をつむがずにいる方が、女というものは、いいんじゃないかしら、そして、うまいことやって、ひよっとしたらお妃になって、何もつむぎもせずに生きている幸福な女って、やっぱりありうるのじゃないかしら。そんな意味で、願望充足という見方ができますね。もっとも、この話は他の意味も読みとることができま

すが。

その七・ものぐさハインツ

すべての怠けものの話が願望充足ということのみで解釈されるのではなく、それ以上ものを感じさせられることがあります。そのような例としてグリム童話一六四番の『ものぐさハインツ』をとりあげてみます。このハインツというのは、ものぐさいものぐさで何も仕事をしないんです。奥さんの方もまた輪をかけてものぐさで、二人ともものぐさでいろいろやっているわけです。奥さんと一緒に朝寝したり昼寝したりしているのです。そして一番大事な最後の所で、うでをふり上げた時に、ハチみつの人っていたつぼが、ガチャンと落ちてくるわけです。上等のハチみつが床にこぼれる。その時ハインツが言ったことには、こんなことになったけれども、つぼがおれの頭の上に落ちなかったということは、何と幸せではないかと。(笑い) そして何ごとも運とあきらめなければいけないもんだ、と言って、かけらの中にちよっぴりハチみつが残っているのを見て、手を伸ばしてホクホクして、この残りカスを「お前と二人でごちそうになろうよ」と二人喜んで、せいては事をしそんじると言っています。ゆっくりそれを食って、楽しみました、というお話です。

この話で大事なことは、サボって、サボってしているうちに、つばをひっかけて、バーンと落ちてきて、ガチャンと割れるけれど、少しもおこらないということですね。そしてどういふことを言ったかというと、つばが頭の上に落ちなくて、実に幸せである。しかもまた、カケラの中にハチみつが残ったことは、何と幸せだろうと言って、西洋にはめずらしい非常に東洋的な考え、つまり運命を享受するという考えをしているのです。われわれ東洋人は西洋人に比べて、はるかにそういう考え方がうまいですね。お父さんが死のうと、お母さんが死のうと、まあこれが運命だから、もう仕方がない。もうあきらめるこっちゃと。そして、われわれ東洋人はスイスイあきらめてしまう。ところが、西洋人の場合、なかなかあきらめない。何とかしてこれを克服しようという現われが、西洋の場合は、自然科学の発展に結びついてくるのです。何とか台風をさけるためにどうしたらよいか。洪水をさけるためにはどうしたらいいか。そしてまたダムを作ることとか、発電をすることか考えますね。日本はどうですか。台風がくると、できる事といったら、なるべくかくれていることですね。雨戸を締めて、(笑い)そして台風が終わったら、終わったなと外へ出てくる。そしてまあ、外はやられたけれど、稲はやられたけれど、家がつぶれなくてよかったな

あ言うて、あきらめます。絶対に科学なんかできないわけです。このように考えますと、単なる願望充足ではなく、なまけものとしての「運命の享受」という一つの生き方、これだけがいい考え方ではありませんけれども、一つの大きいテーマが浮かんできます。そして実際われわれは、人生を生きていく上において、運命と、戦わなければならない時と、享受しなくてはいけない時と、二つあると思います。みなさんは若いから運命と戦う方と思います。みなさんのなかにもう運命を享受している人がいたら、二十歳ではないです。しかし私みたいに年をとってくると、もう運命を享受することを思いますね。ハイイツの話を知ると、非常に感激します。このように、人生というのは、みんな二つの面があるので。

運命に対抗しなかつたら、人間おもしろくありませんし、運命を享受することができなかつたら、また、人生はおもしろくありません。そしてさっきも言いましたように、おとぎ話というのはどちらかひとつの線を非常にきれいに取り扱っているわけですからおとぎ話で相反するものを必ず見つけることができます。Von Franzがこのことを書いています。「おとぎ話の中から一つの方策をひき出すことは絶対にできない」たとえば、おとぎ話の中によくありますけれど、どこか行く時に一番

はじめに行った者が絶対得する場合と、一番後に行った者が得る場合があるでしょう。初めにおれがやってやろうと行って大失敗して、二番目失敗して、三番目に一番最後の人が成功する話。また、その逆のこともある。「虎穴に入らずんば虎兇を得ず」ということわざに対して、「君子危きに近寄らず」ということわざがあるのです。人生って皆両面をもっているのです。

そして、その時その場でその人にとってどちらかが、ある一つが真理なのです。それをどうして見分けるかということとは非常にむずかしいことですけれども、一般論として言うことはできません。だから人生で我々が運命と対抗して輝かしくがん張ることも意味がありますし、運命をそのまま享受する素晴らしさもあります。そこで、西洋のドイツのお話としてこのようなハインツの話があるのは非常に面白く思います。

その八・三人の無精者

ところが、そういう運命の享受などということをもっと越えて、さっき言いました『水木の言葉』では、無精者で柿の木に登るのがいやだから、口をあけて待っていたら、鳥が飛んでき、長者は水木によってやられていと話しているのが聞こえてくる。後で長者のところへ行き、長者が困っているときに、

水木を切りなさいといって、それで木を切って後長者が助かってめでたし、めでたしとなる。そういう時に、他にもよくそんな話がありますけれど、怠け者の特徴として、そういうよい話を聞くことがよくあります。いわば天啓を受けやすいのです。

たとえばグリム童話一五一番の『三人の無精者』というのがあります。短いから読んでみましょうか。

ある王さまに息子が三人あって、三人とも同じようにかわいくなって自分が死んだ後、誰を王さまにしたらよいか見当がつかなかった。いよいよ死ぬという時になると、寢床の前へ呼んでこう言った。「いいかい、わしが一人で考えたことがあるのだが、それをお前たちに話してきかせよう。というのはお前たちの中で一番無精者がわしの後について王さまになるといことだ」一番上のが言った。「この国は私のものです。なにしろ私は無精で、横になって寝ようというとき、目に水の玉が落ちてきたって、寝るのに目をつぶろうとはしないんですからね」とこう言うと、二番目の男が、「父上、国は私のものです。なにしろ私は無精者で火のそばにすわってあたるのに足をひっこめるくらいなら、かかとに火傷した方がましというぐらいですか」と。三番目が言った。「父上、この国は私のものです。なにしろ私は無精者で首をしめられる時になってなわを首に巻き

つけられ、そのなわを切ってもいいよと言って、よく切れる小刀を持たされても、なわのところまで手をあげるぐらいなら、死んだ方がましですからね」と言った。父親がそう言うのを聞いて言った。「お前が一番ひどい。お前が王さまになればいい」と。

これもおもしろいですね、初めに、物語の構成メンバーを考えますと、王さまと子ども三人です。これ、どこが特徴ですか。この話に女性が出てきません。つまり、これは、この国、あるいはこの心、この話の中には女性性というのが欠けているわけです。だからこの話の中で女性性を獲得しうる可能性の一番強いのが王さまになりうるわけですね。そして、王さまが病気になるというのはどういうことですか。それは、治めている一番中心の王さまが死ぬよりしかたがない。これをわれわれ個人に適用して考えると、私という人間も一つの王国と考えます。河合隼雄王国と考えますと、私という王国で王さまが病気になるというこれは、私の最も根本的な人生観がもう朽ち果てようということの意味します。そういう時って皆さんにもありませんでしたか。そんな時、人はどうなりますか、depression（抑うつ症）になりますね。ものすごく気分が沈みます。たとえば、私が今いますように、勤勉に働くことこそ絶対に大

切だと思って、勤勉ということを旗印にしてきた場合には、私の王さまの名前はたとえば勤勉王という王さまになりますね。（笑い）そしてぼくは王さまの言う通り心の中で頑張ってるわけで、勤勉王のいいつけ通りせいぜい働きます。ところがふとある日、私の前に美人が出現してきて、この女の子をもう絶対にお嫁さんにほしいと思うようになる。そこでこの女の子が私の家に遊びに来ないかというから、これはしめしめと思って遊びにいったら家が汚なくてむちゃくちゃ。それでまあとにかくそこらにすわりなさいというのですわったら、ゴミだらけで、でてくる茶わんは洗ってないし（笑い）それでも、その家の人は平気である。どうしてこんな無精な女好きになったんだと思う。私の勤勉王の考えによれば一番駄目な女じゃないか、この王国でいうと最低の女だと思うんですけど、どっからともなく信号ができてあの女はすばらしい、なぜか知らんけれど、あの人がいてくれなければ私は死ぬと思うこと実際あるでしょう。ありませんか。そういう経験をしたことがない人は非常に残念でした。そのうちすると思います。（笑い）

人間というものは、誰しも、その指導原理（*guiding principle*）というものをみんなもっています。それがくずされかかるわけです。つまり、先の例でいうと、勤勉王が死にかかる。つまり、

怠けものの女性の生き方を少しは肯定しなければならぬ。これを思うとゆううつだし、会いにいかんと楽しくないし。会うているうちは楽しいけど、後で考え出すといやになってくる。というふうなそのときが王が病気になった状態なのです。ここで王さまが死んで、新しい王がたつわけですね。そしてそれがうまくいったら大成功なのです。

みんな青年期によく気分が沈むときがあるということは、青年期には自分の *ruling principle* というのがものすごく変わりま
すから、当り前ですね。それまではお父さんかお母さんからもらっています。ところがお父さんやお母さんはそういうけれども、「私だって」というのがでてくるわけです。そうするとその王さまを殺して、時には病気ではなくびんびんと生きていても殺して新しいのといれかえるわけです。だから王さまの病気というのは、おとき話のお得意の話ですけど、いうてみれば、ひとつの体制の *ruling principle* が入れかわるということです。われわれ人間世界が成長してくる。あるいは私という人間が成長するということは、*ruling principle* も常に新しく更新されなければなりません。つまり、ある程度まで成長したら改変されなければなりません。これは非常に苦しいことです。王さまは死なずにずっといてほしいし、その反面、やっぱり変わって

もらわなければこまるし、というところで、いろいろジレンマができてくる。そして、王さまの一番勇ましいときにこそ、王さまを殺すべきだという考え方さえ生じてきます。(王の死については、フレイザー『金枝篇』参照)それは、その王さまが病気のときに継承したら、病んでる魂を継承しなければならない。だから王さまが一番すばらしい時に、殺して次の人がその魂を継承するといふという考え方です。これは未開人の国によくあります。王さまが一番すばらしい時に王さまを殺して王位継承をします。

しかし、それほどのことは、われわれ現代人はやらないなどと思っ
ていますけれど、われわれの心の中では実際行なわれているわけです。特に青年期というのは、王さまを殺さなければならぬ時期なのです。多くの場合それは恋愛とともにやります。非常に不思議ですね。恋愛というほどのばかげたことでもやらん限り、王さまを殺せんですね。(笑い)

ところで、話をもとにかえしますと、この王さまが亡くなつていくとき
には、うちの国は一番の無精をもって王とすると
いうのですね。そこで、首をしめて殺されるというときでも、小刀を持
っていてもここへあげるのがうるさい。小刀を持ちあげ
るぐらいだったら死んだ方がましだという無精ものが王

位を継ぐことになります。

無為にして化す

ここで私は中国における最も理想的な王さまの像を思い起します。中国における王の理想像、それは「無為にして化す」というのです。王さまがいろいろと努力したりするのはなく、何もしていないのに、国中が良い方向に変化してゆく。これは明らかに老荘の考えです。こういう老荘的考え方がヨーロッパの精神文化の主流にはないのに、ヨーロッパのおとぎ話の中に入っているのです。おもしろいでしょ。つまりこれは、おとぎ話というのはその社会の表通りの考え方のみならず、裏通りの考え方をたくさんもっているのです。だから今回後で言う話にも、日本の表通りの考え方とまるっきり異なる裏の考え方が含まれています。つまりさつきから言っていますように、人間の考え方には両方あるのです。必ず二面性がある中のどちらかの一面が非常に強調されて、その社会の *ruling principle* になっています。その場合に忘れられている半面というものは、案外おとぎ話の中に入っているのです。だからこの「無為にして化す」という考え方は、ヨーロッパの表通りにはあまりないと思います。ですが、最も無為なやつが王さまとして最適であるというテ

ーマは、ちゃんとおとぎ話の中に入っているわけです。

ここで少し話が横にいきますけれども、無為にして化すという点から言いますと我々心理療法をやっている人間というのはほとんどこれです。カウンセラーというのは、ものすごいカウンセラーほど何にもしなくなるのです。ほんとに。カウンセラーというのは、何にもしないということに全力を傾注できる人間であると思ふのです。何もしないことに全力を傾注するということはなかなかむずかしいことです。なかなかできません。

話がもう一つ横にいきますけども、こんな話があります。確かスタニスラフスキーという人の書いた『俳優修業』という本にあったと思います。スタニスラフスキーという人は近代的な演出法を考えた非常にすばらしい人ですけれど、その人が、俳優になっていく人たちのために書いたおもしろい本です。その中にいろいろ練習のことが書いてある。皆さんは心理劇をやっておられる人が多いので存知だと思いますが、たとえば私がこの人に、前へ出て、恋人を待っているところをやってくださいという、そんなら皆すぐできますね。すわって時計をみてそわそわしてとか。次に、食事をつくってせっかく待っているのに夫が帰ってこない奥さんを演じてみてください。またそれ

もできます。

そこで次には、「イスにすわっているだけで何にもしていない」というところをやってくれといわれるわけです。そうなる、「何にもせずにすわっている」ということがなかなかできないのですね。すわっていても、何かさわってみたり、何かさわそわと落ち着かなかったりする。舞台の上のイスにすわって何にもせずにいるということはものすごくむずかしいことです。誰もうまくできなかったので、先生が、はい私がやってみますときあつと舞台の上へのぼって行ってパツとすわったら、何にもせずにちゃんとすわって、皆は、はあ何にもしていないあと、見ていられるわけです。安心して見ていられるわけですが、へたな者が何もせずにいるとそわそわして、見る方も何かやらないかという気がしてくる。ところが何もしないということも舞台の上で、しかも皆にあの人は何もせずにいるとはつきりわからせるようにできたら、これはもうすごい名優だと書いてあります。

クライエントというのは、悩みがあつて来るわけです。クライエントがやってきて、苦しいですとか、死にそうですとかいふことを話するのを、何も助けずに何もせずに、ひたすら話を聞いていることができたなら、セラピストとして、大したものだ

と思います。初めのうちは何かしてあげたくてたまらない。そして何かしたくなって、何かしてしまつて大体失敗します。心理療法をしていて失敗したという時、大方は何かをせずに失敗するというより、何かをして失敗する方がよほど多いのです。このように考えてくると、先ほどの『水木の言葉』のお話では、何もしないということによつて変化がおこる。何もしない怠けものにこそ鳥の声が聞こえることが大切だと思われまふ。つまり鳥が非常にいいことを言っているんだけど、誰も聞いてないわけですね。鳥の世間話を聞いた人というのはこの怠けものだけなのです。

怠け者の話・その九・貧乏神

もう一つ無精者の話をします。無精者の話はたくさんあるのですけれど、これは日本のお話で『貧乏神』という話です。ちよつと読んでみましょう。あるところに若い夫婦者が住んでいました。嫁がしようたれ（無精者のことです）でお茶を飲んだら茶がらを、ご飯を食べたら食べ残しをくどの前へ捨てていました。くどつてわかりますね。おくどさん、あるいはへつっいさんとか、知りませんか。かまどのことですが、そのくどの前へ捨てていましたので、しまいには貧乏神がつけ込んでその家

に入りこんできました。そのためにしだいに貧乏になって、しまいはどうにもこうにもしようがないようになってきました。正月が近づいても餅もつけぬ、はてどうしたものだろうかと思つていろいろに年の晩が来ました。大晦日ですね。この場合にはその無精者の嫁さんのために非常に悪くなっていくのです。ところがそれが逆転するのです。

おやじはマキがないので座板でも燃やそうと床板をはずして、くどへくべてあたつていた。ほいだら（そしたらということ、関西弁で書いてあるけれど）奥の方で何か音をたてる者がありました。何かと思つてみると、ボロを着たしゃぐまの（汚ないという意味ですが）老人が出て来ました。親父が座板でなぐろうとすると、俺にも火にあたらせろといつて火にあつた。ほいでどう言ふかと思つてみると、おれはこの家へ来て八年になるが今では何もなくなつてしまつた。おまえの家内はくどの前に茶がらやご飯のカスを投げるから大好きだ。それでおれはこの家に来ているのだ。お前がもしぶげん者になりたかつたら家内に暇を出せといつた。それで男も家内に暇を出す氣になつてそうしてしまいました。

こういうところがおとぎ話の特徴です。つまり、非常に簡単に話が運びますね。この奥さんを離縁しようかするまいか、い

かに悩んだかなどそんなことは書いてない。離婚となればあっさり離婚してしまふ。ほいで貧乏神が言いました。町へ行つて酒を一升買つてこい。男が徳利がないといえは唐津屋へ行つて買つてこいと言いました。男は言われた通りに唐津屋へ行って酒屋へ行つて一升いれてもつてきました。このお金はみんなしゃぐま老人が出してくれました。この汚ない老人が出したのです。今度は酒を持つて帰つて二人で飲んでいました。

今晚は年の晩じゃけに下へ下へと saying 殿さまがお通りになる。殿さまがかごののつて向うから来るけにその時かごの中をめぐめてなぐりこめと言うので、男はそんな恐しいことできるものじゃない、と言ふと貧乏神はそのほかにはお前の家が金持になる方法はない。どうしてもなぐり込めと言いました。男は貧乏神のいうことにさからうわけにもいかぬと思つて天びん棒を持つて待ち構えていました。するとやはり貧乏神の言う通りたくさんのちようちんをつけておかがやつてきました。天びん棒でかごの中をなぐろうとしたが、誤つて先ぶりをなぐりました。するとぼこつと死んでしまいました。そしてかごはまっすぐに通り過ぎてしまいました。死んだ先ぶれの男を見るとそれが銅貨になっていました。男があきれて見ていると貧乏神がやつてきました。どうして殿さまをなぐらなかつたのかとたず

ねました。それから、年が明けたらもう一度かごが来るのに、それもなぐればよいと教えました。男は天びん棒で殿さまのかごをめぐって打ったところが、大きな音がして何かくずれました。かごの中からは一分金や小判がぎくぎく出てきました。そのお金を拾い集めて、男はまた昔のようにぶげん者になったそうです。

結局この男、すごい金持になるんですね。そのことを教えてくれたのが貧乏神なのですが、その貧乏神がどうして来たかというところ、奥さんが怠け者だったためにやって来たのです。そうすると、やっぱり怠け者の女性を妻としていたために、結局は得をしたことになるわけです。この話は後でもっとくわしく解説してみたいと思いますけれど、ここで殿さまをなぐるなんてのがでてくるでしょう。つまり殿さまという絶対なぐってはいけないものをボーンとなぐってこそ金が手に入ります。これはおそらく徳川時代にできた話ではないかと思いますが、そのころの *ruling principle* の逆でしょう。つまり殿さまという者は下に下にときたら顔をあげてもいけないのに、それを打ちなぐるぐらいの者こそ金を獲得できるんだというテーマがちゃん入っているわけです。だから民衆の力というものは強いと思います。表面にどんな考えがあるにしても、必ず裏の方をおと

ぎ話としてみんな持つてるわけです。

この話でも、怠けものにつけこんでやってきた貧乏神が、一番大事なものです。殿さまのかごをなぐることによって金持になるといふ天啓を与えてくれる。そう考えますと怠け者の非常にいいところというのは、天啓に対して耳が開かれているということです。その逆を言いますと、勤勉に働いている人というのは、天啓に耳の開いていない人です。レポートを書かねばならない、試験があるので勉強しなくてはならない、アルバイトもと走りまわっていたら、ちょっとはお金が入ってくるし、ちょっとは成績もよくなる。そして、レポート出せとか試験を受けろとか働けとかいう、お父さん、お母さん、先生とかいう人たちの話ばかり聞かされてきて、それもまあ結構ですが、つまり *outer reality* に対して非常に結構に適応できるけれども、一番大事な天啓に対して耳を閉じているわけです。

これは、心理学でならわれたと思いますが、仕事への逃避です。これは怠け者の逆をいつている人です。よく仕事をしているようだけでも、実は仕事に逃げてるんだ。試験があれば一生懸命調べて、試験もやらなきゃいかん、クラブもやらなきゃいかん学生運動もやらなきゃいかん、朝から晩まで働いて、ものすごく充実して生きているような人というのは、必死にうわべ

の生活を充実することによって内面生活を収縮させている人、そういう人を仕事へ逃避しているというのです。だから何にもせずに朝から晩まで下宿でぶらぶらして、学校へもでて来ない人というのは、よく内面に耳を開いている人で、またそういう人はともすると外面の方には耳を閉じています。(笑い) そう考えますと、怠け者で成功した者は、天啓を聞いた限り動き出ししている。そうですね。このしゃぐまの言った限りは実際天びん棒を持って殿さまをなぐりにいきます。この場合でもやっぱりやめとくわ、お前いつて来いやなどといってはためですね。三年寝太郎もそうで、三年という時を待っていていざという時に活躍します。だから、いざという時、天啓を受けながら動かずにいると、怠けものは決して成功することがありません。特に『貧乏神』の話では、怠けものの妻に暇を出すという決意が示されています。つまり、怠けものはどこかの時点で怠けと訣別しなければならぬことを、この話は示しています。

怠けものが、今のべたような決意をすることなく、ただ単にそのときまかせの状態にのみとどまっていたは、結局のところいろいろとやってみても元のところにおさまるにすぎないことは、日本の『天にのぼった息子』という話にうまく表わされています。時間がないので、この話のことはあまり話せませんが、

興味のある人は読んでください。怠けということのなかに、いつ、どのようにして主体性を関与せしめてゆくか、というむずかしいパラドックスを解決しなくては、怠けものの意義はなくなってくるのです。

怠けものは天啓に対して開かれているなどといいましたが、天啓といういい方がきらいな人に対しては、自己実現という言葉を使ってもいいと思います。われわれが自己の実現に努力するといっても、いったいどの方向にどのようにして実現しているってよいかわからないことが多い。それが確実に把握されるまでに、そういう自己実現してゆく方向がわかれば、ただちにそれに従ってゆこうという決意をもって模索している状態、自己実現に対する非常に高いレディネスをもった状態が、怠けものであるということができます。

さて、われわれもあまり熱心に勉強して、天啓を聞く機会を失うと大変ですから、このあたりで怠けることにして、今日の講義は終わることにします。(天理大学)

★文中の日本のおとぎ話は、関敬吾編『こぶとり爺さん・からち』、『桃太郎・舌きり雀・花さか爺』、『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎』(岩波書店)によった。

わたしのオブザーベーションズ(II)

ー幼児教育、日本留学報告ー



マリヤ・リー・ベナビデス

適応、言語、自発性、創造性などについて

私たちが、これまで人生の大部分を一緒に過ごしてきた祖国、家族、友人、仕事を遠く離れた土地へ私たちを運ぶ乗物を前にする時、私たちにただ一つわかっている事は、さまざまな想いと期待を胸にこれから未知の国に向かって行くのだという事だけです。

日本の幼稚園における教育方法・技術を視察し、習得するために、メキシコ政府が、私に許可した留学についての私の個人的体験に関して、お話ししたいと思います。私は、メキシコ市にある幼稚園で八年間働いていた教師です。

六ヵ月前に国を出て、東京に直行しました。なぜ、

日本を選んだかと申しますと、まず第一に、私にとって幼稚園教育 (Education Prescolan) が非常に重要な意味を持っているという事と、第二には、日本という国が、古い物と新しい物、東洋的なものと西洋的なものとを組み合わせ、伝統的な習慣を保持しながらも、同時に進歩のもたらす革新を容易に受け入れる事ができた国であるからです。ここ東京で私は、新しい人々、

生活、時間、食物、気候等、全く新しい事づくめの中で生活を始めたわけです。着いてすぐに、視察のための活動を始め、いろいろな授業を受け始めた時にも、最初の三ヵ月は、先に述べましたいろいろな点で適応していくためについやされたと言えます。外国に学ぶ人は、誰でも、周囲のふん囲気に慣れるのに、ある程

度の期間を必要とすると思います。この事は非常に重要な点で、出来るだけ短かい期間で慣れるようにすべきだと思います。つまり時間の大半を私たちのおもな目的に費やす事ができるようにです。

私たちが、環境に適応していく過程で、習慣種族の相違、更には、哲学的、宗教的思想の相違でさえ、人間関係に与つての障害にはならないという事が、しだいにわかるようになります。大切なのは、各個人の行為です。そして、この個人の行為は、私たちの価値観や判断を広め、偏見から自由にします。そしてまたおそらくは、より公正な見方ができるようになります。

いったい、何と何が、私たちの失敗した点であつたのかを、距離をおいて眺める時には、あやまちというもの、よりはつきりしてくるものです。そうするのは、あやまちを嘆くためではなく、私たちの将来の行為を改善し、私的かつ職業的な生活を改善するためなのです。困難ではありますが必要な変化を通じて、私たちが、これまで慣れていたさまざまな因襲を克服し、学ぶ事而努力を通じて、順応的態度を変えていくのです。こうした努力が少しずつ私たちの日常生活の一部となり、知らないうちに、毎日、何かを学ぶのです。

それは、一つの言葉、一つの経験だろうし、時には、大して重要でない事であるかもしれないし、または、非常に重要な事かもしれないけど、常に何か新しい事を学ぶのです。学び知つた事のすべてが、私たちの内面に、太陽の光線のように入りこみ、私たちの周囲の人々への熱に、つまり何か有用なものに、変わつて発散されるのです。仕事については、新しく学んだ技術方法を私たちの国にもち帰ると共に、私たちの受け入れ国に何かを残していけると、私は確信しています。どんな人でも必ず、生きてゐる限り、何か貴重なものをもっているはずなのですから。

各国の政府は、地球上のあらゆる国民の友情と平和を希望すると言います。国民というのは、各個人からなるものであり、各自の出身国が、こうした事を希望しているという事を示し、自分の生まれた祖国への民族主義的感情からではなく、威厳をもって国を代表するのは、各個人の責任であると、私は考えます。というのは、私たちが、家族に対してと同様、祖国に対していただいている愛情は、破壊的なところのない刺激剤であるからです。

適応能力と轉換能力は、人々が適応しようとする欲

求の程度にかかっているものです。いいかえれば、ある人が適応しようと本当に望めば、出来るものです。なぜなら、それは上塗りの作業だからです。つまり、私たちの古い習慣、慣習の上から、私たちが必要とする新しいものを重ね塗りするわけです。

私が今回、奨学生になる以前には、今まで一緒に暮らしてきた家族という集団は、一部には、私がそれを必要とみなしていたゆえに大切なものであり、愛すべきものでありました。しかし、家族という核の外で暮らしていけるだけの能力が私たちにあるのだという事に気づく時、家族への愛は、単なる生活共同体というわくを越えて、よりいっそう純粹で、誠実なものに変わるのだと考えます。あらゆる人が、自らの力と、自らの限界を知り、確固とした人格をもって、社会の一員となり、単に快適ではあるけれども、あまり実りのない共同生活に、私たち自身を閉じこめてしまうのではなく、社会集団に有用な成果を貢献する事が、非常に重要な事だと思えます。

学生一人一人が、克服すべき問題は種々さまざまあると思いますが、私の場合には、そしてこれは皆に最も共通している問題だと思えますが、経済問題、健康

状態と共に、時に感じられる悲しみ、ノスタルジー、あるいは孤独感といったものでした。解決を要するさ細な問題に出くわさないという事は考えられませんが、それも勉強の一部であり、私たちの環境への適応をより確固たるものにしてくれます。これから行こうとする国に関する本を読んで知識を得る事は、誰にしろ助けになる事は、言うまでもありません。そうすれば異和感をいなく事も少なくなります。なにしろ、衣食や氣候に関する日常生活の細かい点や、私たち皆が知っている一般的な知識以上に、広く歴史や言語を学ぶという事は、全くむずかしい事なのですから。

言葉の違いというのは、意志の疎通に際して、問題になるとは思いません。言葉は違うけれども、理解したいという共通の気持でいけば、さまざまな意志表示の手段を使うという事で充分です。その手段のおもなものとして、身振りで表現するという事があります。これは、広くて豊かな言葉です。子どもたちがあれだけ使っているながら、私たちおとなは、少しずつ失いつつある表現でもあります。これを機会に、私たちの体、目、顔、手を再び用いて、他の人々を理解する事

を、学びなおそうではありませんか。

自発性というのも、人間を知るうえで、非常に重要な手段ですが、これもまた、あまりに用いられる事がないので、受け入れられないのではなからうかというおそれから、頭で先に判断をしまつて自然な瞬間というものを台無しにしてしまうのです。

自発生は、よく心理劇や心理テスト等に用いられませんが、これをわれわれの日常生活においても、誠実に、そして理解されないのではなからうかというおそれを



周郷先生と一緒に

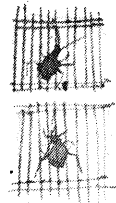
もたずに使ってみようではありませんか。この最後の判断は、私たちの周囲の人々にあてはまり、私たちの人格の不可解な部分を読みとるのに時間をつぶさないようにするためにいい方法です。

Schala Shipを与えよう。一つの刺激は、創造欲を刺激するという事だと思えます。創造力は、人間の生活の一部をなし、他の生物と人間とを区別するものですが、多くの人間は創造する事を忘れつつあります。二度と目覚める事のない夢におちいる事のないように、日々に養っていかねばならないものです。

学習し、観察し、楽しむための時間が限られている事を知っている時には、私たちの力と欲求を毎日刺激し、その内部に創造力を再生するものですが、一番大切な事は、この間に私たちが学びとった事が、わが国に戻った時に、消え去ってしまわないようにする事ではなく、その反対に有用でないものは切り捨て、最初のうちは思想と慣習の上塗りだったものを、いっそう確実に、私たちの人格そのものの中にとり入れていく事です。帰国のあかつきには、肉体的な相違は、皆同じ人間であるという現実の前に消滅してしまうという確信を持ち帰る事と思えます。(四二七、一九七二)

愛珠

想い出ずるままに (十六回)



中村道子

一 父の日を創設する

昭和廿七年の四月に入園して、いつも妙子さんと呼ばれている女の子が、無邪気な笑顔を私に向けて、「きのうはお母さんありがとうの日でしたな!!」というから、私は「そうでした!!」お母さんに、カーネーションの花をあげましたか」と尋ねると、「あげましたら、えらい喜びはりました!! 『綺麗な可愛い花やなあ!!』というて、胸にさしはりました」

「先生!! お父さんありがとうの日はいつのですの?」お父さんの、来られやすい日にしましょう」「お父さんには何の花をあげましょうか」何の花がよいか、皆で考えてちょうだいな」そうや!! 皆で相談しましょう」それでほかの幼児たちにも話すと、喜んで賛成したので、日時や贈物の花を、子ど

もたちで決めるように約束して今日の会集を終えた。

この日から数日が過ぎた朝会の時、一年保育の年長組の幼児らが「先生この間、父の日をいつにするか皆で考えたときなさいと、いいはったでしょう!!」それで皆で考えて、六月の三番目の日曜日がいいといひ合いました!!」そうでしたか!! それからお父さんにあげるお花は何になりました?」皆はいろいろな花をいひましたが、五月の節句に菖蒲の花を人形に供えたから、あれならたたみ方で習ったからあげられるわ!! 菖蒲やったら中の組でも折れるし、一番小さい組には、僕らの大きい組が折って作ってあげたらいいわ」といひました。そして早速この日から、父の日の準備が始まった。

菖蒲の花のたたみ方のむずかしい所が一個所あった事をよ



く知っているから、誰にでも強いてせず、楽しく父を思う想像の中に、思いをこめさせて自由な気持で当たらせた。花も始めは濃い紫色が多かったが、その中にたまたま薄紫や黄色の姿も見えて楽しかった。しかし白色を見なかつた事は、不幸の友の無い事を知っているからだと思ひ、わざと質問すると「白色をあげるようなお友だちがありませんから——」と笑ってしまった。

父の日の次第として書かれた園長の挨拶には、幼児の要望から今日の会が生まれたもので、一同が拍手賛成した事を話し、今日父への贈物の菖蒲の花は、年長組はもとより年少組も、皆喜んで熱心にたたんだ事を話すと、お父さんたちもここにこほえんでおられた。ついで父への感謝の歌は、母への感謝の歌から曲をもらい、歌詞もお父さんのに作りかえて、喜びと感謝の意を表わした。そして父の代表になってもらった教育長には、菖蒲の花束を正面の台の上で、代表の子どもからうけてもらった。

二 清水多嘉示作「植樹」の塑像を玄関脇に置く

昭和二十七年九月のある日、私は放課後校長講習会に出かけた。土佐堀川にかけられている梅檀の木橋を渡り、中の島公園に出て剣先の方を少し遠くまで眺めると、芝生のくさむ



らや木立の影に、おのおの所を得て美しいいろいろな塑像が配置されてあった。いずれを見ても美しくきりが無い。しかし、「そうだ講習に遅れるといけない!!」と思い、心を残しながら講習会に向かった。

帰りみち再び公園に戻ってさっきの続きを見たが、植樹の像の前で立って二、三回まわって見た。何度まわって見ても、「この像は愛珠幼稚園にほしい」と思った。

いま、愛珠幼稚園の正門前に、大きく育っている大山木も、二葉のころにはこの植樹の像の苗木ぐらいの大きさであったろうに、数十年余をへて現在のように大きく育って、屋根をおおうほどに成育している。真夏には誰もが木影にしたい寄って行く。そして像の苗木のような、愛珠に集まる幼児たちも大きく育って、いろいろな友と手を取り合って、相互に成長発展して行く姿を想像して、ぜひ愛珠のものになってほしいと、その像にいいながら、愛珠幼稚園に帰ってきた。

それから私は決心して、作者の清水先生に直接手紙を出してお願した。

折返して清水先生からの返事を受けた。軽い封筒の中には一枚の便箋が入っているのみであったから、私はちよつと不安を感じたが、文面には「子どもたちの育成のためという気

持ち」を察して、おゆずりする事としましたとの許可が書かれていた。「植樹」は愛珠にくださったのだ、愛珠の物になったとうれしかった。玄関脇の前庭をうるおわせる事だろう。それに大山木の青葉に映えて、緑の庭になるだろう。ついで私は当て所もなく空を見るように考えた――。

植樹に寄せる詩はPTA役員の方が竹中郁先生に紹介して下さった。それは、

あたたかな

ひかりにあてて

きよらかな

水をそそいで

の四行の詩であった。そして文意の部には、パネルに入る字の美しさ、誰にでも読みやすく、植樹している女の心の中のつぶやきとして、作詩したとのご親切なご留意が書かれています。

さあ!! 植樹は愛珠の物になり、植樹に寄せる詩も、得られたが、この際、丈四、五尺の海棠一株を、像のうしろに植えて、園名「愛珠」との機縁の表象として、ぜひ添えたいとの意をいっそう強くした。

それは私が、この愛珠幼稚園に赴任して来た時、この愛珠幼稚園の園舎が、普通の園舎と建築が違って、玄関から園舎全体の構想が、ご殿ふうであったから、着任すると間もなく創設者滝山瑄氏が記録せられたという沿革史を一気に読んだのである。この沿革史の中に綴られていた園名の撰択には、当時大阪市で漢学者として屈指の藤沢南岳先生に師事していた愛珠創設者四五人の中、滝山瑄氏と豊田文三郎氏が師弟の關係から師に懇願したところ、南岳先生は袁士元の海棠の詩から、幼児を珠と見て愛珠とせられたらしい。

しかし今までは、最初の二行しかわからなかったこの詩が、この機会にいろいろな方のご好意で全部わかってうれしかった。

海棠の詩は次の通りである(書林外集卷二)

主人愛花	如愛珠	海棠	睡起	春正美
春風庭院	如畫園	花貌	參差	玉人似
袞衣曲逕	步花影	主人吟賞	夜不眠	
翻々夜月	飛長裾	直欲題詩	壓蘇子	

三 倉橋惣三先生、愛珠幼稚園に來園視察せらる

昭和二十八年九月二十九日に、大阪私立幼稚園保育会主催の講習会が、四天王寺會館で開催せられ、講師として今は亡くなられた、倉橋惣三先生が來阪された。先生にはご病体とのことだったが、至極元気よく三日の会期を過ごされて翌日、先生ご夫妻を愛珠幼稚園に迎え、創立以来の保育資料や玩具等を整理整頓し、園内の施設配置等を視察していただいた。

園舎は明治十三年六月一日の創設当初から二度の移転をへて、従来の二園舎の欠陥を考慮して補うべきは補って、現在の所に、幼稚園教育施設として欠陥のない園舎を、特別建設して移ったのである。園内の広さは約五百八十六坪で広く、十坪の屋内運動場の高さは高く、玄関から広い廊下、保育室等も皆一面のように高さが同じで、区別に気付かず、木の香がすがすがしくて、新園舎を見に來た区内の人たちは、ご殿幼稚園といったそうである。それから約十二年の後、木造建築の火災を恐れて、倉庫のみを鉄筋コンクリートの堅牢なものに改築されたそうで、これをさいわいに、私は旧資料室をここに移し、倉橋先生にも見ていただいたのである。

先生は「よかったね!!」と一言いってくださったので、私も大変うれしく思った。

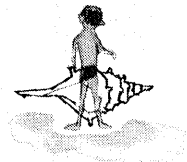


にしき
錦のほなし

あやにしきといえは美しいものを形容するのに用いられています。なかならず錦は金に等しく、染織品中も最も高級なものとされており。錦の「に」は丹、「し」は白、「き」は黄で、いくつもの色糸をもって模様を織り出しているもので、一色の色糸を用い、織り方の相違で模様を浮き立たせ、装飾効果をあらわす綾とは異なります。

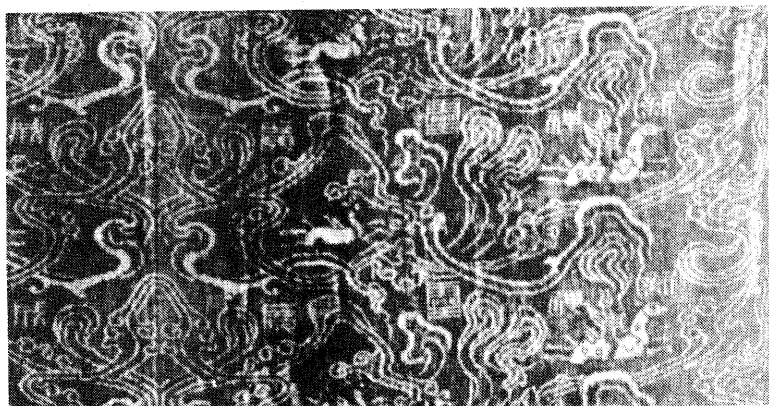
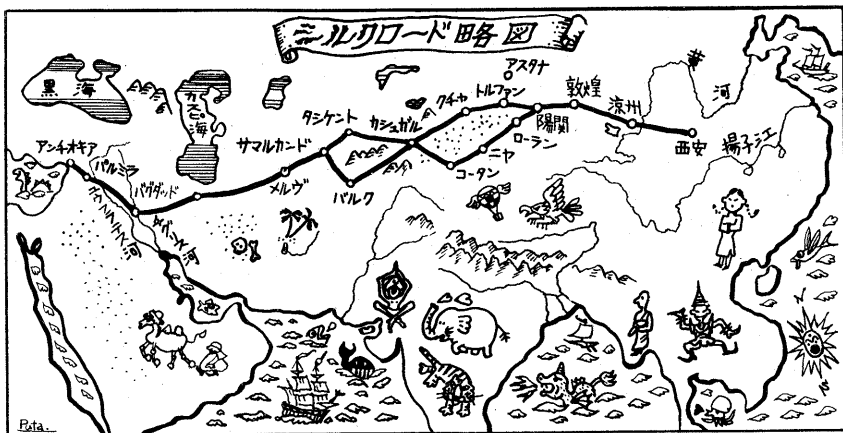
最近、上野の東京国立博物館で正倉院宝蔵の染織品の模造展が開かれましたが、ご覧になったでしょうか。わが上代の古裂は久しい間、他の工芸品ほど重要視されない時期がありました。その質のすぐれていることと共に量的におおびただしく、世界的な文化財として重要な地位を占めておるといわねばなりません。この正倉院蔵、あるいは法

横張和子



隆寺以来の上代の古裂は、文字通り断片化してしまっています。その年代は七世紀から八世紀にわたり、中国では初唐から盛唐にまたがる時代であります。

正倉院蔵の古裂の模様をみますと、ペルシア風の、またペルシア模様源流をもつような文様の多数を見いだしますが、さらにビザンチン様式も見受けられ、これらが盛んな東西文化交流の所産であることがわかるのであります。ところでこれら錦綾は絹糸で織られ、今にその光沢の美しさをとどめておりますが、生糸をとる桑蚕の術は中国が創始であろうとされています。その源は古く殷の時代（前一二〇〇）に絹で織られた布があったといわれております。中国の絹は布に織られ、遠く西方世界（ローマン・シリア）



漢字がおりこまれた経錦

に運ばれました。その交易の道がシルク・ロードでありま
す。事実、この絹の道に沿う
古代都市遺跡において発見さ
れております。イギリスの偉
大な中央アジア探検家である
A・スタイン卿により中国新
疆省タリム盆地にひろがるロ
プ砂漠の楼蘭の古址から、ま
たさらに西漸して、地中海東
岸とユウフラテス河の中間に
位置し、隊商都市として繁栄
したパルミラ遺跡の墳墓から、
漢字を織り込んだ明らかに中
国の錦とされるものが発見さ
れております。楼蘭は四世紀
ごろ、パルミラは三世紀のお
わりにそれぞれ滅び、そのま
ま砂漠に没してしまいました
ので、これからの出土遺物の

年代の下限は三―四世紀とすることが出来ます。

しかし、これら出土発見の錦は、わが正倉院蔵の天平裂などとは外観を甚だ異にするものであることが注目されます。天平裂に見るような大柄で、多色華麗な模様とは異なり、色調は幽暗で、図様は雲気文という、山岳のように連続し、ところどころうず巻状の節のある怪異な文様帯が波状をなす間に、幻想的な獣や鳥を配しているものです。さらにこの模様には神仙的な意味の漢字を織り出しているものがあるのですが、このような織銘に関し、東西の学者により解説が試みられ、ある錦の年代観は、それが紀元一世紀のはじめの製作であろうと結論され、このような錦が中国漢代において製織され、異域に運ばれていったことが実証されたのであります。またこれら漢代の錦の織り方を調べますと経糸で文様を顕わしているものであります。これを學者は経錦（きんきん）などと呼びますが、これに対して天平裂の多くの錦のように緯糸で顕文されているものを緯錦（いきん）と呼んでおります。この経錦、緯錦の用語はその時代に区別して用いられてはおりませんが、その相異に関しては織物史上画期的なことといわねばなりませんし、なお東西文化交流の観点からも興味ある事実を含んでおります。

経錦は中国で創始され、紀元前後にはその技術は完成の域に達し、巧絶精妙な錦が織られ、北辺の異域の民族の慰撫のために、また西方に向けては交易のために多量に送られて行きましたが、これを手にした匈奴や西方のギリシア・ローマ人は、これを珍貴な宝のようにとうとびました。ことにその絹という材質はよろこばれ、珍重され、ローマの博識家プリニウス（紀元二三―七九）のしるすところでは東方遠来の絹織物はほどかれ、節約して再びそれを用い、布に織りなしたとあります。この記事に関し、織物をほどくその作業の間にその布の織り方の秘密をもさぐったであろうといわれております。

そもそも西方世界では、六世紀ごろまでは蚕を飼い生糸をとる術を知らず、織物の用糸にも羊毛糸を用いていた人は、布に模様を織り込むために古くからつづれ織の技法をとっていました。その場景はギリシアの壺絵などに見ることが出来ますが、簡単にいえば、二本の柱を間隔おいて立て、その間に横木をわたし、その横木いっぱいには経糸をならべ、その糸の末端に重石をつけて糸を緊張させ、その間をぬって、色緯糸（いりいと）を用い、賦彩に必要なだけ色糸を打ち込んで折り返し、文様を作って行くのですが、この技

法では布面いっばいに模様を反覆、繰返して織り出すことは出来ません。

これに対して、中国からもたらされた錦では、布一面に模様織り出され、しかも量産も可とされるものであります。すなわちこれを織る機は空引機（そらひきばた・花機とも書く）というもので、この機の装置によれば、模様を機械的に反覆して織り出すことが出来、さらに左右相称に、上下打ち返しに模様を織り出すことが出来るのであります。この機もまた中国で創案され、四世紀以前に西方に伝えられたのであらうと考えられています。この機を用い、他方中国の錦の組織の秘密を知った西方人がその模織を試みたであらうことは容易な推定ですが、シリア工人の作であらうとされる羊毛製の経錦の遺例があります。経錦は経糸に色糸を用いるもので、普通三色を一組とし、これを一本の糸に見立てて、これをもって地と模様を顕文して行くのであります。必要な色糸のみを表に出し、他は裏に沈めるこの操作を経糸において行なうことは、決して容易なものではなく、非常な習熟と辛抱強さを要する仕事であつたと考えられます。

これを羊毛糸で織る時には、それが短繊維であるために

錯綜してきわめて困難になつたと考えられますが、こうした困難な経験を通して、西方人はそれまで習熟していたつづれ織の技法にかわつて、この中国の空引機を用い、経糸と緯糸の関係を九十度転回して、緯糸に色糸を用い、模様を織り出すことを案出したのではないかとされております。このようなやり方ですと経糸の数は経錦の場合の何分の一に減らすことが出来、文揚げの通糸の数も減少させることが出来、その結果、大柄の模様を作ることが可能となり、さらに色糸の数も機の装置に拘束されることが少なく、多色の使用が可能となり、ここに章彩綺麗な緯錦が織られるようになったといわれております。

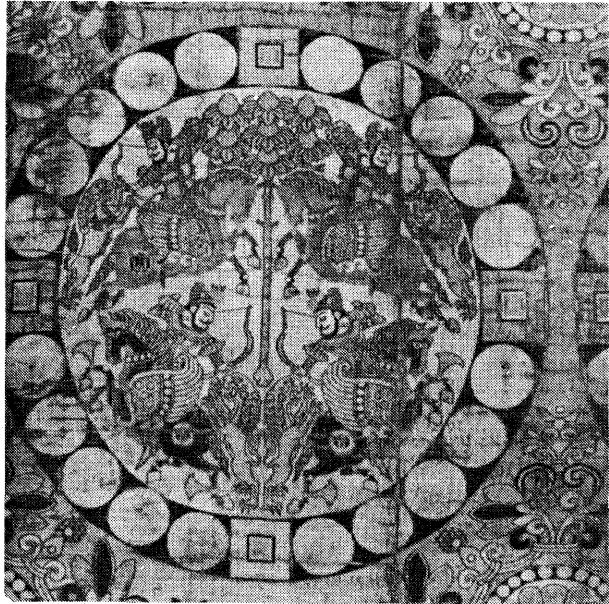
つまり、緯錦は西方人の発明であるというのが現在、大勢の説となっております。かつて、中国から西方に漢の経錦が運ばれて行きましたが、六世紀の末ごろから、絹の道を逆転して、東方にこの緯錦が送られてくるようになったと考えられております。シリア人が創案したであらうと考えられている緯錦の技法はササン朝のペルシアに入り、そこでその意匠と技法とはより洗練され、唐代中国のみか、東ローマ帝国にも流入し、それは西欧中世美術にも深く影響を及ぼすこととなります。

中国では古く伝統的な経錦の法はなお行なわれ、法隆寺に伝来する蜀江錦なる赤地の美しい錦を生み出しますが、八世紀に入るとこの技法は絶えて行なわれなくなり、これに代わって緯錦が主役となります。中国人が自国に伝えうけつがれてきた錦の技法を捨て、緯錦に転換して行くことになるのは、もちろんその技術が機能的にすぐれ、その上経済的にも審美的にも優秀性をもっていたからであると考えられますが、中華思想に自負する中国人が、異邦の文化をどのように受容したかを、この錦の技術の転換において見いだすことは興味のあることであります。それを示す、ちょうど、転換期に当たる錦の遺品の数々を中国新疆省のトルファン地区のアスタナの古墳墓から得ていることは学術的に高く評価されるところなのですが、この地域の発掘調査には前記のイギリスのA・スタイン卿が当たっておりますが、日本の東本願寺の大谷ミッシンもほぼ同じころ、それを行ない、また戦後の中国が実施し、新しい報告が出されております。その一々をお話する余裕をもっておりませんが、この地にササン朝ペルシアの錦がもたらされていたことはほぼ確実で、それが中国にまで達していたことは史書に明らかで、これら西方伝来の緯錦にならってペルシ

ア様式の錦が中国で織られて行ったことが考えられます。ここで注目すべきは、奈良、法隆寺に蔵される四天王文錦と称される国宝の錦であります。というのは、これに様式を同じくする錦がアスタナ古墳で発見されているからであります。すなわち、大ぶりの真珠のような白い円文を五つずつ連ね、四方に重角文を配した藍地の大きな円環文、円環文の中央に立てられた一本の果樹文、それを中心に左右に凶像を配している構図は、大きな円環文の並ぶ間に配されたパルメット唐草の菱形の華文と共に独自のスタイルをもっておりますが、法隆寺錦では四騎の騎馬人物が相称に、上下に向きを違えて配されておりますが、その人物の容貌は髪濃く明らかに胡人の顔つきであります。彼らは弓をひき、背後から襲いかかる獅子に向かつて、いまや、矢を放たんとしている場景をあらわしておりますが、このような凶柄は、東京の出光美術館に所蔵されている、ササン朝ペルシアの帝王狩猟図銀製皿の凶様に酷似していることに気がつかれます。星辰を象徴する連珠文の円環文、一本の立樹、そしてその左右に鳥獣人物などを配する凶柄はペルシア模様の典型であります。ことに一本の樹文は、生命の樹、あるいは聖樹と呼ばれ、それを中心に左右相称の構



ペルシアの皿



四天王文錦

図をもつものは織物模様のみならず、前三千年記にさかのぼる古いメソポタミアの芸術に根ざし、西アジアではイスラム時代に至るまで続けられているものなのであります。

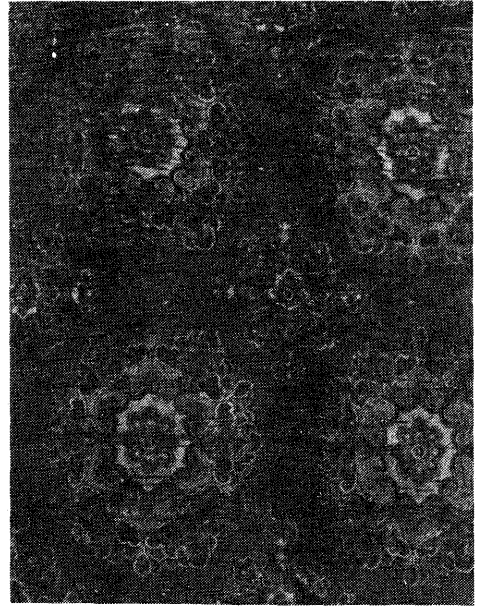
このように単位文が截然と割り切れる幾何学性はペルシア芸術の特徴であります。漢代の錦が連錦と続けられはつきりせず、複雑な模様であるのに比較して、その相異が認められるのですが、それゆえ、これらの錦は東方のイランで製織したものとされてきましたが、馬の腹部の円文中に漢字を織っておりますから中国産であることを証するものであります。この顕著にペルシア的な中国産の錦は緯錦の法で織られております。すなわちこれらの錦の製織をもって中国で本格的に緯錦を織り出したはじめとしておりますが、それがいつごろ行なわれたかについてはなお論議のあるところとされております。七世紀のおわり、または八世紀のはじめというのが定説ですが、わたくしは七世紀の前半を考えております。

ところで、中国ではこのような左右相称に鳥獣を対置させている文様を瑞祥の模様とし、その文様を織り出した錦を瑞錦と称したことは中国画論にみえております。ペルシア錦の文様ではアスタナ出土の錦や、ヨーロッパの美術館

やキリスト教寺院に宝蔵されている錦の例からみて、靈化された動物（猪の頭、天馬、山羊、鳥、グリフォン）などが多いのですが、このような鳥獣文がそのまま中国に受け入れられたのではなく、道家的な瑞祥思想を透過して、中国文化に定着したと考えられます。上代裂にみる鳳凰や獅子の文様はこのようなペルシア文様に流れを発しているのであります。しかし中唐以後には、中国では佛教の興隆に伴って宝相華などの超現実的な大華文が織り出され、また杜甫や李白が生きた時代にはその詩風と同じく、写実性が反映し、自然主義的な絵模様の錦が織り出されてくるようになります。正倉院蔵の天平裂にはこの時代のおおどかな、豪華

天馬の文様





な作風の錦が多数含まれております。有名な琵琶袋錦の妖麗なまでの美しさは経錦の技法では到底のぞむべくもないことで緯錦の法にして実現し得たもので、さらに組織の綾絡みの織技は一層これに光沢を与えて、にしきの精髓のきわみを示すものであります。

わたくしはこれら上代の古裂を、また中央アジアから出土した錦の断片を観察する機会を得ておりますが、なかには小さな断裂のみか、毛筋ほどになってしまっているものがあります。これらは多くは板ガラス二枚にはさまれたいわゆる玻璃装となっておりすが、ガラス越しにせよ、こ

天平裂

れらを凝視しておりますと、そのすぐれた文化財はさまざまなことを語りかけてくるようであります。その一つ一つを観察することは、子どもの観察研究と変わらないような気がいたします。

古代の工人が専念して作り上げたこれらの作品を、いかに断片化し断爛化しても、なお、敬愛をこめて保存して行こうとするのは、学術的な目的の他に、そこにほんものの魅力があるからであります。模様のある布は巷間にあふれ、珍しいものとはしなくなり、しかも多量なため、使い捨てなどがいわれておりますが、身近なものにおいても、永く愛着に耐えるものとは何かを、これらの古裂は深く教えるところのものだと思っております。小さな子どもさん方に、もう一度、ものを大切にするを語りかけることを考えられてもいいのではないのでしょうか。そしてこれには大切にされるものとはどんなものか、それを知る必要など、そのような教訓のようなものを古裂研究において考えられるのです。

(お茶の水女子大学)

壁画古墳

高松塚の感動

太田 康 和

三月二十四日早朝、信州での地質調査を終えた私は、雨の降る京都駅に着き、すぐ近鉄線に乗り換え奈良に向かった。大学が休みになるとかならず一度は奈良に来なくては気がすまない私なので、信州での調査の疲れも忘れ、ただただ菜の花がさきみだれる春の大和路を想像しながら、一人で見覚えのある窓外の景色をなつかしい気持ちでながめていた。奈良に近づくにつれ雨も

小降りになり、西の方が明るくなってきた。「ああ、もう晴れるなあ。さて、今日はどこへ行くか？ やはり橿原考古学研究所へまずは行って、遺跡の話でも聞こう」こう考えて、すぐ実行に移ったのであるが、この決定が、今考古学界戦後最大の発見として騒がれている高松塚壁画古墳発掘を見学できるといふ幸運のカギを握っているとは、私自身思いもよらなかったことである。話が横にそれるが、私が考古学に興味を持ちだしたのは小学校五年の時であった。小学校の校庭で須恵器という古墳時代の土器を見つけ、それを当時、家の近くにあった関西大学の考古学研究室に持ちこんでからである。そこにいらした学生さんや教授の方に親切にしていたいただいたことをいいことに、毎週研究室に遊びに行くにつれて私の考古学熱も急上昇したわけである。そし

て当時やさしくしてくださった学生さんが、今では奈良県の文化財保存関係の仕事をされ、橿原研究所にいらっしゃるのだ。さて、なつかしさと期待に胸をふくらませて私は一年ぶりに研究所を訪ねた。中に入ると、なつかしい方々が昨年と変わらず親切に私をむかえてくださった。そしてこの一年間の奈良県下の発掘について種々うかがっている内に「今、明日香で古墳の発掘をやっている、今から見に行くんだが君もどうだ」という話が出た。私は二つ返事でおもしたということを言った。そのついでに「どんなものが出るんですか？」とたずねてみた。すると「ま、見たらわかるよ。大変なものが出るんだ」という返事だけで詳しいことは教えていただけなかった。私もおっしゃる通り、とうなずきそれ以上の質問

はやめ、はやる心をおさえて車に乗り込んだ。外はもうすっかり晴れて太陽がまぶしかった。

途中車の中で「大変なもの、大変なものってなんだろう？ 鏡でも多く出たのかな」などとその大変なものをあれこれと想像してみたが見当もつかなかった。やがて車の左前方に、文武天皇の御陵が見え、その手前の小高い丘の方を指さして研究所員の方が「あそこが発掘現場だ」といわれた。指さされた方向を見ると、林の中に白いテントが見える。あのテントの下に大変なものがあると思うと胸が高なるのを感じた。車を文武天皇陵の前に止め、所員の方に続いてみかん畑の中を古墳に向かって歩いて行った。朝まで降っていた雨のため、道はぬかるみとなっていてはやる心とは反対に足が滑り、なかなか進めない。悪戦苦闘して

進むうちにみかん畑がとぎれ、急に視界が開けると同時に、小さな塚があったかも知れないとされているかのようにシートをかぶされて私の目に入ってきた。

「小さいけどきれいな古墳だなあ」。たしかに小さい。今までなら写真も写さないで通り過ぎてしまうようなどこにもある小円墳だ。でも、どことなく均整のとれた高貴なふん開気のただよった古墳だ。古墳に近づくにつれ、発電機の音が大きくなり私の興奮に拍車をかける。「あ、綱干先生だ。伊達先生もいらっしやる」。私が防衛大に入校の一カ月前、藤原宮跡の発掘を手伝った時お世話になった先生方だ。

所員の方があいさつされ、何やら打ち合わせをしている。その間私はあたりを見回した。「大変なものってなんだろう」また先ほどの疑問がわいてくる。古墳の脇に張られたテントの下に、何

やら木の箱に詰められ大事そうに保管されている。ビニールを通して見るとお棺のようだ。よくみるとまさしく乾漆棺の破片だ。「これで少し疑問がとけた。古墳でも時代が下り、飛鳥にふさわしい古墳だ」などと一人で学者きどりになっていると、綱干先生が「入、中で作業中だから見てもらえないが写真で我慢してほしい」と言われてアルバムを持ってこられた。私はさっそく見せていただいた。

一枚目は石室内を全体的にとったものらしい。大変なものはまだピンとこない。二枚目をめくり目をそそいだ。

「あゝ」とは口をあけてじっと写真に見入っているだけだった。そのうち体がふるえだし、わが目を疑いなん度もまばたきしてみた。「絵だ」それもお札にある聖徳太子のような人物がはつきり……。次々にページがめくられ、

婦人像、男子像、玄武、青竜、白虎などが表われる。説明してくださる綱干先生の声もうわずり、ふるえている。一通りアルバムを見終わってもまだ信じられない。「どうしてこんなものが……。大変なもの、大変なもの、本当にこんな大変なものがこの小さな塚の中にあるのだろうか」体がふるえ、発電機の音が遠くで鳴っているように聞こえて、しばし私の回りの時間がとまってしまったようだ。次に感じたのは、一目でいいからこの壁画を見たいという欲望であった。写真ではまだ信じられない。本物を見たい。そう思ってふたたびアルバムに見入っていると「それじゃあ、少しだけのぞかせてあげよう。作業中だからちょっとだけ」といって綱干先生が発掘穴の方へ私たちを案内してくださった。所員の方々に続いて、一步発掘穴へ近づいた。足が宙に浮い

ているようだ。「壁画が見られる」そう思っただけでも足がガタガタふるえる。

背をかがめてシートの中に入ると、シートを通して入ってくる光が古墳の赤土に反射して、人々の顔を赤く染める。皆の顔色は興奮による紅潮と、反射による赤みで無気味な色をしている。

発掘穴の一番奥に穴のあいた岩が見え、その穴を通して石室内で作業をしている人の身体が見える。そーっとしゃがんでその穴から中をのぞいてみた。

「ああ、本当に絵が書いてある」

まず奥壁の玄武の図が目に入ってきた。皆と顔を見合わせ、またすぐ石室内に目をやる。少し冷静になり壁画をみた。向かって左側の奥（後にわかったのだが西壁の婦人像）に一きわみずみずしい緑色の色彩がある。よく見ると緑色の服を着た人物像だ。「なんて美

しい緑色なんだろう」この緑色が千数百年前のものだとすることをだれが信じられるだろうか。それほどみずみずしいのだ。右の壁を見る。こっちにもある。人物が並んでいるのが見える。でも左の壁の緑に心が奪われているためか、はっきりとした印象が残らない。どうしても緑が目がすいよせられる。

あまり長くいると作業の邪魔になるので、早々に穴を出た。ほんの四、五分間の見学であったが、とてつもなく長い間穴の中にいたような気がして疲れさえ感じた。印象が強烈すぎたようだ。時間がたつにつれ、大変なものという意味が実感としてわいてきて、いつまでも体のふるえが止まらなかった。私は壁画を見ることができた、という満足感に酔いながら、少し距離をおいて、小さいが、**大・変・な・もの**を持っている古墳をながめてみた。「いったい誰の古

墳だろう」、素朴な疑問がわいてくる。

「すぐ南には文武天皇陵があるし、五百メートル北には天武、持統天皇陵、とするとやはり皇子か皇族の墓か？」

それとも宮廷の要人か？」「天武、持統、文武天皇に關係があり、古代史の重要人物なら草壁皇子か……」私はしろうとであり、学者でないがため、自由に、そして無責任に考え、また想像できるという特権を生かしている想像してみた。私は古代史のなかで、大津皇子と草壁皇子の間の皇位継しように関する争いの物語が好きだ。大津皇子の悲劇的な死にあわれさを感じるのだ。だから何の学問的根拠なしに大津と草壁の名が頭に浮かんだ。この古墳の被葬者は私の想像とは何の關係もない人かもしれない。しかし当時の風俗、服装はこの壁画の人物像と大差はないであろう。草壁皇子も大津皇子も、この壁

画のような服装をして飛鳥の里を、そして藤原の宮をかつ歩していたことであろう。私が奈良にひかれるのは、大津皇子の物語を始めとして、古代史に出てくるさまざまな出来事が、この地を舞台にくり広げられたからである。

古代史の舞台になり、今は田畑や荒地となつてしまつた宮跡や寺跡に立ち、当時を空想することのなんと楽しいことか。そしてそれはしろうとの特権だ。専門家となると、私のようにただロマंचシズムに酔つたような空想、想像はゆるぎない。学者とはそれであるがゆえに尊く、また学問的に疑問を解決するという、私の空想とちがつた楽しみがあるのだろう。

高松塚を見学した帰りに、私は飛鳥の里を散歩してみた。今まで以上に飛鳥が身近に感じられる。当時の人々の服装があざやかに心に残っているから

だろう。遺跡に立つとあの緑色の人物像がまた頭に浮かぶ。

高松塚の壁画は、私の空想に必要な新しいデータを吹き込んでくれた。

私の空想が、いっそうリアルに、そしてさらに楽しいものとなつたのだ。

新聞によると、壁画の色が日一日と色あせていつていっているそうである。たしかに新聞写真で見るとあの婦人像の緑色は、私がこの目で見た色とは全然違つたものになつてしまつていいる。どうかこれ以上、あの緑をあせさせてほしくない。

壁画の完全保存を望むと同時に、私の心にこの青春時代に受けたさまざまな感動が、年とともにうすれないようにと祈るのである。(防衛大学)

洋書紹介

A Guide to Discipline

by Jeannette W. Galambos

1969 by the National Association for the
Education of Young Children

江波 諄 子

NAEYCから出版された三十二ページの小冊子である。子どもに毎日触れる幼稚園や施設の先生、それに家庭のお母さんむけのわかりやすく、愛情深い内容の本である。具体的な場面を例にとりながらも、その中に著者の子どもとつき合う上での強い哲学が、やさしく表現されて貫き通っている。著者は、「しつけといってもこの本は、子どもを罰したり、力づくでコントロールするのではなく、子どもが自分を尊敬し、他の人にも尊敬の念をいざくことができるように教える本である」という。

そして、「先生ということばは、子どもに触れるすべての人の意味する」と前置きしています。つまりお母さんも、バスの運転手さんも、清掃する人も、幼稚園の先生も、ヴォランティアの人々も。

子どもをしつけるのには、手荒い方法やただ愛情のみを表現したりなどいろいろな方法があるが、「よき先生とは、よきコントロールとしっかりしたしつけができればならない」と著者はいっています。「先生はしっかりとし、観察深く、おだやかでしかもよきユーモアのセンスを持ち、ひとりひとりの子どもはそれぞれ違うという認識の上で、彼女の意志を貫くことである。そしてその意志は、常に子どもの顔や声の敏感な変化の中から出てくるものでなければならない」

さて、「私たちは先生としての自分が好きでしょうか」と著者は最初の質問を問いかける。

「子どもを扱っているかぎり、私たちは誰でも、よい日とうまくいかなかった日を経験しています。自分が高い理想を持っていても、それを実行するのにはあまり疲れすぎていたり、子どもたちが乱れすぎていたりすることもあります。子どもをよく理解する人々は、子どもは動くようにできている、注意をむけてやったり、ほめてあげるのが大切なのだ、そして子どもたちはある日赤ちゃんのようにふるまったかと思うと、次にはもう成長している、これが子どもの本来の姿であるということを知っている。けれど学校のような集団の場では、今後は子ども自身が自分をコントロールしたり、規律を受け入れなければならぬのが集団の特性なのです」

最初の質問の中で著者は、最も大切なことは「先生自身が自他とも真に信頼、尊敬する中で子どもたちもそのように育っていくのだ」という。「先生がよきコントロールと愛情の中で教えているのかどうかの問題なのだ」といつているあたりは、まさに清水エミ子さんの説く愛と規律の保育ということになるのである。また、子どもたちが幼い時代にお互いに人間として尊敬できるようになるよう強調して説く部分は、E・Hエリクソンの始めの二つの発達段階、信頼と不信、自律と疑いの時代

にも匹敵しよう。

第二に、「私たちは幼稚園でのいろいろな問題を避けるために、事前に何ができるでしょうか」と問う。それには、

① 幼稚園で子どもたちが来る前に、先生は自分自身に十分な時間を与え、精神的になごやかなふん囲気で子どもを待つこと。② 子どもたちが来たら、彼らにも十分に自由を与えるようなよいプログラムをたてること。③ いつも魅力的に準備されたへや(適度に整理され、適度に新鮮な遊具が出されるへや)かどうか調べてみることに」

の三つを大きくあげています。

「こんなふうにしても、いろいろなトラブルは起こることは確かなのです。子どもがへや中を走りまわり、人や物をけつていたらどうしましょう。先生はまず静かに子どもを落ち着かせます。子どもはわかるのに時間がかかるかもしれないけれど、またいなづまのようにすぐにわかるかもしれない。先生は子どもがなぜそんなに落ちつきなくふるまうのかおなかがすいているのか、何かこわいのか、おもしろくて興奮しているのか、それとも何となく高揚しているのかを考えてみます。そして、その子の手をしっかりと握りながら、やさしく、威厳をもって、まず彼は何をしたらよいか方向づけながら話します。しばらくの間はその子どもと一緒に過ごし、彼に深い興味を示

しましう」

それではへやのすみっこで何にもしない子がいたらどうしましう。

「彼は気分がよくないのか、家で叱られたのか、引っこみ思案なのかいろいろ考えます。ともあれ彼は何となくその時は無力に感じているのです。そんな時、周開からとやかくいわれても元気は出てこないものです。多分、よき先生は、そのままの彼を受け入れ、彼の調子にあわせ、おだやかな規律の中で彼に手をさしのべたい気持ちを表わすことでしょう」

では、子どもがけつたり、たいたたり、ひっかいたり、投げたりしていたらどうしましう。

「こんな時先生は必ずその子どものそばへ行つて、面とむかつて話します。子どものいらだつ気持を理解しながら、荒々しい行動を阻止し、それに代わる身体的な遊びや運動へと導きます。パンチングバッグを出したり、外でボール投げをするのもよいでしょう。しばらくして子どもがおだやかになったら、子どもの体をやさしくつかみながら、彼がもう大丈夫であること、そして彼が何かいいたいことがあったらいつでも聞きましましうと告げます」

以上のように、子どもが何か望ましくない行動をした時は、必ず先生と子どもが一对一で面とむかい、適当な狭さの静

かな空間で、子どもの小さな体を大きな両手でやさしくしつかりつかみながら、深い愛情の中で冷静に話し合うことは、アメリカの幼稚園の教師の態度として特色のある点であるようです。私たちのこの手と目と声は、子どもとつき合う中で非常にとうとう道具にもなるし、またとり返しつかない深い傷をも残してしまいます。もっと、もっと大切に有効につかいたいものです。

最後の四、五ページに、著者は子どもとじょうずに話す方法を例をもつてあげています。その中からいくつかを選んで紹介してみましう。

●そんなに長く順番を待つのはつらいことだわ。三分したらそのトラックを彼にまわしてあげましようね。

●いいえトム・アリスは悪い子ではないの。ただ、今ちょっと、問題がおこつて大変なのよ。

●リサ、サミーの絵はただ、ぐちゃぐちゃ描いているのではないのよ。これが彼の描き方なの。彼が考えた方法よ。あなたも自分の方法があるでしょう。どちらでもいい方法なの。

●バートがひとりであそこにいるの。かまわないのよ、心配しなくても大丈夫。時々ひとりになって、ほかの人を見ていたり、きいていたりしたいことあるでしょ。

●ええ、ティムあなたが自分の名前書けるの知っているわ。でもバートは書けなくてもかまわないの。それは彼の好きなようにいいの、みんな自分のやり方であるでしょ。

●ジョージ、あなたがお父さんになりたいのわかるわ。でもね、この家に二人お父さんがいてもおもしろいわ。それに祖母さんもふたり、それとも、おじいちゃんがいてもいいし、おじさんがいてもいいわね。

●アリス、もう少し静かに泣いてくださいらない。あんまり大きな声で泣くとほかの人たちが驚くでしょう。泣くのはかまわないのよ。時々みんな泣きたくなりますもの。どうしたのか話せるようになったら先生に話してね。誰かアリスにティッシュペーパーを持ってきてくださいいな。

●彼に尋ねてごらんなさい。それをうばいとってもいいかどうか。誰もあんまりうばいとられるの好きじゃあないわね。きいてごらんなさい。彼は「いや」といった？ じゃあ何か他のものをさがしに行きましょう。先生も一緒に行くわ。

●アンソニー、あなたの考えとてもおもしろいので、もつときましたいわ。でもほかの子のお話も聞いているの。これが終わったら話してちょうだい。きっと聞くて、お約束するわ。

●ほかの子がお話している時は音を出さないことよ。アレンさん、マークとむこうのテーブルへ行ってくださいますか。

そこにパイプクリナーがあります。とってもおもしろいのよ。そこで静かに遊べるでしょう。

●バーバラ、あなたが今日お家からお人形持ってきたの知っているわ。とっても素敵ね。でも、ほかの子が見るとみんなさわったり抱いたりしたがるわ。先生も手伝うから、みんなにこわさないように見せてあげましょう。それからお家へ帰るまでどこかに置いておきましょうね。どこか特別よい所をさがしましょう。

●床の上に水があると、すべりやすいわね。ここにモップがあります。さあみんなでお水をふいてしましましょう。スポンジもここにあるわ。この次は注意してお水をくみ、あんまり一杯になる前にとめましょう。できるわね。

「しつけは単に、ことばとか、技法とか、規則で押しつけるものではなく、その時、その場のようすが大切なのです。……時には成功し、時には失敗もする。生身の若い人間である先生にとつて必要なのは、限らない理解とエネルギーの供給であります。でも時には、必要な時にそれらが無いこともあります。けれどそんなことは理想をあきらめる理由にはなりません。人間について、学ぶべき、受け入れるべきものはたくさんあります。私たちは時には、自分自身を許して、また新しくやり直してみるのです」と最後の章を結んでいます。



Life

December 17, 1971

Special Double Issue

—Children—

雑誌ライフの一九七一年十二月十七日号は、子どもについての特集号である。子どもの世界をカメラによってとらえたり、子どもの書物や創造性について書いたり、幼児の学習や情緒、身体発達についてまとめたり、世代の交代や養子の問題にもふれている。

その中のブックレビューで、レインズ夫人は特色ある子どもの本をいくつか紹介している。以下はその部分からの抜粋である。

「六〇年代の半ばから、幼児むけの書物の文も絵も共に、社会秩序のぐらつきを徴候を、明らかに表わし始めた。もはや、単に内容をアルファベットの文字であらわしたり、動物の名や数などを扱うのではなく、絵本の著者やイラストレーターは変わった。この秋に行なわれたエール大学での『子どもの文学に関する会議』でも—現実と幼い子ども—とか、—子どもの文学における激しさと死—等というテーマが深刻にとりあげられた。驚くことに、書物それ自体が、ただ悲しげで傷ましいのがあるのだ。

たとえば、『Changes, Changes』という本の中で、英国人作家兼イラストレーターのパットハッチンズ (Pat Hutchins) は独特な知恵とスタイルの作品をあらわした。絵を見ただけでも、いかに一組の頑強な木製の人形が、二、三ダースの融通のきく積木を使って、陽気に火事や洪水や種々の危険を乗り越えるかというのがわかる。フォスター (E. M. Forster) がおとなにとってとうといことばとして『つながり』(Only Connect) といったのに対して、同じようにハッチンズは今日の幼児に強力なアドヴァイスとして『適応力』(Only Adapt) となっているのであ

る。

こっけいなのは、四歳から七歳の幼児むけのアメリカの反成物語である『The Pancake King』(P. L. Fargeの文Schwastによるさし絵)である。

小さな主人公のヘンリー・エッジウッドはパンケーキづくりの底抜け騒ぎをひきおこす。しかし、荒々しい企業家のアーサー・ジンカーを知るとヘンリーのぜい沢さんまいは人生の喜びを失った慰めにはならない。とうとうヘンリーは名声に背をむけ、七歳という年齢にして、成功もまた腐敗であり、完全なる成功は、完全なる腐敗であることに気づくのである。

『Shewbetinas Birthday』という本では、著者のジョン・S・グッタル(John S. Goodall)は言葉なくして、のどかな英国の田舎でさえも、もはや安全ではないといっている。半ページの独創的なさし絵は動きを表わしなかなかよい。が最初の現代的な涼味が終わると、物語は従来の沈滞した中で居心地よく内容をすすめる。

『Amos and Boris』という本の中でウィリアム・スタイグ(William Steig)は確かに子どもの本の第一級の創造者として、晩成の名声を得た。この新しい書物の魅力は、明確な文章の深さと同時に、明瞭な水彩画の微妙な芸術的技にある。船乗りねずみのアモスは、自己実現の絶頂から、現在の失意のど

ん底に落ちるのだが、適度の甘辛い樂觀主義でもって、著者は子どもたちに人生のものすごい恐ろしい予期できない出来事と、それに対する小さな者の勇敢な反発力を語っている。

一九七一年の全く荒廃した絵本は『Yellow, Yellow』である。フランク・(Frank Asch)が文を書き、マーク・アラン・スタマティ(Mark Alan Stamaty)が絵を描いている。この本はあるレベルでは、小さな少年が、工事現場の労働者の黄色いヘルメットをみつけ、それを大切に、最後に返すというあかるい冒険談でもある。しかしながらスタマティのながいペン書きの絵は、暗い社会の一面を加えている。近年に隠とんしたドイツキリスト教信者の世界観のように、とりとめもない消費者は、確かに自からへこんだビールのあきかんの下に埋められている。そこでは、ミニスカートをはいたおばあさんが単車のペダルを踏みながら永遠の若さを宣言している。そしてこのしゃれた都会の悪夢の中で、小さな黄色い帽子をかぶった主人公は、澄んだ目をして断固として、彼の心臓の鼓動にあわせて町を歩くのである。われわれの唯一の望みは、このようにひねり曲がった夢のない文学の中で育つ現実の子どもたちが、それらに染まらず、主人公のように歩んで欲しいということである。

(十文字学園女子短期大学)

○天気の良い晴れた一日、幼稚園の庭で子どもたちが遊んでいた。私がしよに遊んでいたひとりの男の子は、よやく園庭に出て、探険隊になって出て行こうとしていた。突然、戸外で大きな声でアナウンスする声がかきこえ、子どもたちはざわざわとへやに入りはじめた。それは光化学スモッグの警報であった。いまよやく探険隊になって出て行こうとしていた男の子は、もう一度へやにもどろうと誘っても、聞く耳をもたないことはいうまでもない。見ると砂場でも、へやに入りたくないとかんばっている子どもたちがいる。青空に太陽が輝き、雨の多い六月には貴重な一日である。この太陽の恵みを避けて、へやの中に入って窓を閉めきつていなければならないとは何とあわれなことであろうか。光化学スモッグ、ああ、光化学スモッグをひき起こすものは何ぞやと、私は青空を仰いで暗い心になった。

○今月号には、幼児教育の専門的な記

事を少くして、教養的な文章を多くしました。森田宗一氏は、家庭裁判所の判事として、現代最も困難な問題の一つである青少年問題にとり組んでおられ、幼児教育にも大きな関心を寄せておられます。河合隼雄氏は、人間性を深く探究したユングの心理学の研究者です。ユングの心理学は、今後の幼児教育の研究にも大きな示唆を与えてくれるものと思えます。以上、いずれもお茶の水女子大学でなされた講義を掲載したものです。

横張和子氏は、児童問題を専攻され、同時に美学の専門家ですが、とくにいま関心をもっておられる錦織について述べてくださいました。一片の布きれにも、古代の人の知恵と心がこめられているのを知って、驚きました。太田康和氏は、高松塚古墳の発掘に立ち会う幸運にめぐまれた若い学生です。私どもが、何とも思わぬで足の下に踏んでいる土の中にも、無形の宝がかくされているのかもしれない。(津守)

幼児の教育 第七十一巻 第七号

八月号 定価一〇〇円

昭和四十七年七月二十五日印刷
昭和四十七年八月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

お日さまの下で遊ぼう!



3か月保証付!

キンダートンカ

★ダイナミックシリーズ

セット定価 16,300円

ダンプトラック	4,800円
ブルドーザー	3,200円
シャベルドーザー	4,800円
セメントミキサー	3,500円
*ヘルメット4個サービス!	1個 400円

★サンシリーズ セット定価 6,500円

ジープ	1,000円
ブルドーザー	1,200円
シャベルドーザー	1,400円
ダンプトラック	2,900円
*ヘルメット2個サービス!	1個 400円

カラフルなプラスチック製!

砂場用品

★キンダー砂場セット

セット定価 6,000円

砂型(4種類)	黄・緑	20コ
シャベル	赤・青	40コ
フルイ	ピンク	10コ
バケツ	赤	4コ
整理用カゴ	黄	2コ

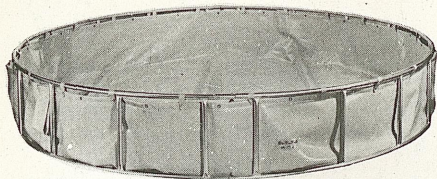
★砂型トレイン …セット定価 1,100円

★ます ……4個1セット 250円
赤・黄・青・緑

★一輪車(鉄製) …… 3,200円

夏に強い味方あり!!

フレーベル館の水あそび用品で夏を快適に



キンダープール (A)

- 《組み立て式》鉄枠は4つに分解でき、丈夫で軽く設置は簡単です。
- 排水管がついているので、排水にも便利です。
- 直径280cm、高さ45cm、ほこりよけのビニールカバーと整理袋つき。

46,000円



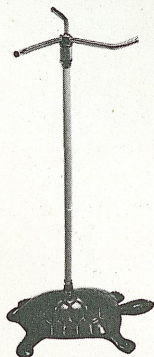
キンダープール (B)

- 枠を硬質塩化ビニールにして安価にしました。
- 品質、寸法、その他《A》とかわりありません。

29,000円



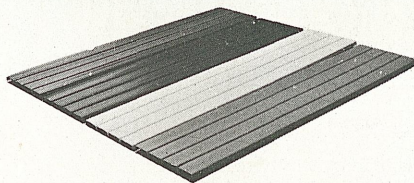
フレーベル館



キンダースプリンクラー

- 蛇口につなぐだけでOK、水圧で円形に回転します。
- 高さ30cm～130cmまで、5段に変化。
- 鉄製、緑色の亀さんです。

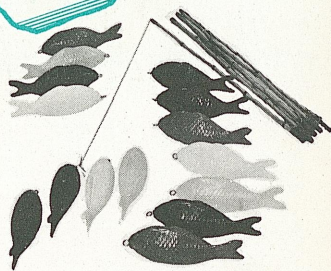
2,800円



キンダーカラーすのこ

- 赤・黄・緑・青の4色です。
- プラスチック製の丈夫で美しい、すのこです。長さ180cm 巾42cm
- 各色とも、単色4枚連結。

各色6,000円



魚つりセット

- プラスチック製
- 白・赤・黄・緑・青が各3尾
- 〈計15尾〉

釣竿5付 1,400円

※この他に、魚5尾、つり竿2本で1セットの(小セット)もあります。

540円